

デート

DV

VOL.6

白書

デートDV予防教育実施状況調査報告書



デート DV 白書

vol.6

デート DV 予防教育実施状況調査報告書

デート DV 防止全国ネットワーク

「デート DV のない社会の実現」を目指し、2017 年 3 月 19 日 デート DV 防止スプリング・フォーラムにて、設立しました。現在、17 団体（個人含む）が運営委員となり、今後の運営方針を検討しています。

「デート DV 防止全国マップ（<http://notalone-ddv.org/>）」を作成し、デート DV 予防教育の講師派遣、啓発グッズ等の制作、相談窓口を担う団体や機関を現在約 100 団体掲載しています。

認定 NPO 法人エンパワメントかながわは、事務局を担っています。

目 次

巻頭座談会	-----	P 1 ～12
I 調査の概要	-----	P13
II 調査結果	-----	P15
1. 回答者について	-----	P16
2. 調査結果 ① ～ ⑧	-----	P17～27
3. 記述回答	-----	P28～30
調査結果によせて	-----	P31～35

卷頭座談会

座談会 参加者プロフィール



山口のり子

アウェア代表

DV と性による差別のない社会を目指して 40 年、日本及び海外で活動する。シンガポールでは DV やセクシャル・ハラスメント被害者支援及び裁判支援に関わり、ロサンゼルスでは DV 加害者プログラムを実施するためのトレーニングを受ける。帰国後 2002 年に「アウェア」を開設して DV 加害者向け教育プログラムを始める。2003 年に「デート DV」という言葉を日本で初めて使って本を出版し、若者向け防止教育を始める。2006 年から各プログラム（デート DV 防止プログラム、DV 加害者プログラム、被害女性プログラム）実施者の養成をしている。著書に『愛を言い訳にする人たち－DV 加害男性 700 人の証言』、『愛する、愛される－デート DV をなくす・若者のためのレッスン 7』、『デート DV 相手を尊重する関係をつくる』（すべて梨の木舎）他、共訳に『DV・虐待 加害者の実体を知る』（ランディ・バンクロフト著 明石書店）、『恋するまえに デート DV しなない・されない 10 代のためのガイドブック』（バリー・レヴィ著 梨の木舎）



正井禮子

認定 NPO 法人女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ代表理事

1992 年、ウィメンズネット・こうべを発足。女性と子どもの人権を守り、男女平等社会の実現に向けて地域でさまざまな活動を行う。95 年の震災以降は「女性に対する暴力」の根絶、特に DV 被害女性の支援に力を注ぎ、相談・付き添い支援、民間シェルターを運営し、その後の生活再建まで支援している。2013 年、DV 被害女性・シングルマザーや子どものための居場所－WACCA（わっか）を神戸市内に開設、仲間づくりや学習支援を行う。DV の被害者も加害者もつくらないため中・高・大学生へのデート DV 防止出前授業を実施（約 18 万人）。地域住民や企業の社員を対象に DV 防止研修や支援者養成講座も行う。



中田慶子

NPO 法人 DV 防止ながさき理事長

2002 年に DV 被害者支援を目的として DV 防止ながさきを設立。相談、支援活動と並行して、2004 年から若者対象の予防教育を始める。2005 年「デート DV を知っていますか」を作成して以来、予防教育普及のためにテキストを工夫。2013 年「デート DV 予防教育テキスト」を作成。また、こどもへの影響の深刻さを実感し、2016 年避難してきた子ども達のために「私の青いノート」を制作。



佐々木一憲

BLT グループ代表 ・ 岩手県 BBS 連盟会長

1991 年から更生保護ボランティアである BBS (Big Brothers and Sisters movement) の活動を始めて、困難を抱える子ども・若者たちと接してきました。2009 年には仕事で男女共同参画の担当となってから DV やデート DV について学び、一緒に活動している大学生たちとその学びを深め、岩手県内の中学校と高校でデート DV 予防講座を始めました。2016 年には思春期保健の知識も加え「BLT いわて」を翌年には「BLT にいがた」を立ち上げ、大学生と一緒にデート DV 予防講座を続けています。BLT とは、B=bond (つながる)、L=learn (学ぶ)、T=tell (伝える) の意味で、お互いを尊重できる関係づくりについて伝えています。



阿部真紀

認定 NPO 法人エンパワメントかながわ理事長

1999 年 CAP (子どもへの暴力防止) スペシャリスト資格取得。2004 年エンパワメントかながわ設立。デート DV 予防プログラムを開発し、2009 年度～2013 年度神奈川県との協働事業「デート DV 防止システム構築事業」を担当する。2011 年デート DV に特化した電話相談としては全国で初めての「デート DV110 番」を開設。デート DV 予防プログラム実施者養成講座 (中学生向け・高校生向け・大学生向け・教職員向け) などの講師を務める。2017 年 3 月デート DV 防止全国ネットワークを設立し、現在事務局を担う。

デート DV という言葉が生まれて 14 年。デート DV 予防教育が各地に広がりました。
今日は、初めの方から活動をされている皆さんに集まっていただきました。

まずは、デート DV という言葉を誕生させた山口さんから、言葉の由来、どんな思いからデート DV 防止講座を、ファシリテーターの養成を始められたのか？ お話ください。

「デート DV」の言葉の由来は？



山口：海外駐在員の「働く、妻としてシンガポールに10年在住し、女性支援の活動にかかわりました。その後、ロサンゼルスに行き、DV対策においては先進国のアメリカで学び、帰国後「DV あなた自身を抱きしめて」を、さらに「デートDV」という言葉を日本で初めて使って「デートDV防止プログラム実施者向けワークブック」を出版。本が新聞で紹介されると1000件以上の問い合わせをいただきました。本を出すにあたって、迷ったのがそのタイトルでした。アメリカではいろいろな言い方をされています。デーティングバイオレンス、デートレイプ、インティメイトパートナーバイオレンス、デーティングドメスティックバイオレンス・・・その中で何がいいか、交際している若者に起こっていることもDVそのもの。DVという言葉を使いたかったんですね。バイオレンス、レイプは使いたくなかった。なぜなら、バイオレンスやレイプが起こっていないければ、自分たちのことではないと思ってしまう人がいるからです。DVという言葉を使うことで幅が広がるかなと思いました。デーティングという言葉は日本語ではあまりなじみがないので、書籍の編集者と相談して「デートDV」ということに決まったのです。わかりやすいし、言いやすいし。とてもよかったのではないのでしょうか。

学ぶ機会提供する「ファシリテーター養成講座」

2003 年にこの本が出て、多くの人が手に取ってくださいました。ただ、この本だけではわかりにくいという声もたくさん聞こえてきたので、そういう人たちと一緒に、勉強する機会を作りたくなりました。そこで、2006 年から養成講座を始めました。学んだ人を認定し、さらに継続学習のためのフォローアップ講座を年 1 回開催しています。2017 年は金沢で 11 回目。仲間は全国に 180 人くらいいます。2018 年は東京で開催します。

その言葉を得て、それぞれの地域で活動が始まったと思います。
皆さんから、活動を始められた経緯をお話してください。

デート DV の被害者も加害者も作りたくない

正井：2004 年から DV 被害者を支援しています。被害を受けている女性と子どもたちの心の傷が深いということ、その回復にとっても長い時間がかかること、そして生活再建が本当に厳しく、貧困をかかえるという現実を知って、もう被害者も加害者も作りたくないという痛感。DV をなくしていくためには若い人への防止教育が急務！そんな思いに押されて 2006 年からデートDV の防止に向けての活動がスタートしました。



予防教育が必要

中田：DV 防止ながさきは 2002 年に立ち上げて、2003 年から相談活動を始めました。相談活動をして気が付いたのは、DV 被害はすでに交際中から始まっているということ。交際を始める頃に DV についての知識がないことが、被害を深刻にしていると思ったわけです。予防教育が必要だと思っていたところに、山口さんの書籍のことが新聞に載っていたんです。「あ、これだ！」と、すぐに山口さんに連絡をして、佐世保と長崎で講演会を開催。2004 年のことだったと思います。そこには、学校で生徒の悩みを聴いている養護の先生方がたくさん来て。そこで「予防教育が必要だ」と共感していただきました。まったくなし！という感じで、2004 年の後半から私たちなりのプログラムを作成して、現在に至る…山口さんとの出会いがなかったら始まっていなかったということです。



若い人にこそ知ってほしい

佐々木：もともと、個人として更生保護の活動をしていました。仕事では男女共同参画にかかわって、2009 年に岩手で山口さんの講演会を開催しました。その話を聞いて、若い人の困難って「そうだ、これだよ」と思いました。若い人同士の困難と非行が繋がってる。その背景にある暴力をなくしたいという思いから、2010 年にファシリテーターの養成講座に通ったのです。そして同時に若い人にこそ、デート DV について知っている人を増やしていくことが大事だと実感しました。



デート DV を予防することで、DV や虐待も未然に防ぐことができる

阿部：エンパワメントかながわは 2004 年に CAP（子どもへの暴力防止）プログラムのスペシャリスト 16 名が集まって作った団体です。CAP だけでなく、ほかのプログラムも自分たちで作りたい、そう思って新しい団体を立ち上げました。ちょうどその半年前に山口さんのこの「デート DV」という言葉に出会って、私も「これだ！」と思いました。CAP は子どもたちに人権を伝えます。「安心して、自信をもって自由に生きる権利があるよ」…私たちは暴力防止のために日々人権を伝えています。「デート DV 予防プログラム」もその一環として作ったのです。

当初、「最初は高校だね」そう話して、高校生向けデート DV 予防プログラムを開発しました。CAP と同様、クラス単位で提供することを基本とし、クラスのなかに 3 人のスタッフが入って劇をしながら子どもたちと一緒に意見を出し合い考えていきます。デート DV を予防することで、DV や虐待も未然に防ぐことができる…提供していくなかで中学生にも必要だ、そういう声に押されて、中学生向けのプログラムも開発。大学生向け、生徒のデート DV に気づいた時の対応を織り込んだ研修としての教職員向けも実施しています。



14 年間進めてくる中で、特徴もそれぞれの団体で違ってきていると思います。

それぞれのプログラムの特徴、工夫されていることをお話してください。



山口：アウェアの若者向けのデート DV 防止プログラムの特徴はジェンダーを入れているところだと思います。

4 つのコアな基本的な気づきを子どもたちに促すプログラムで、「力と支配」「暴力容認」「ジェンダー・バイアス」「恋愛や交際に関する考え方の歪み」…これらに気づいて、DV の被害者にも加害者にもならないようにするためにどうしたらいいかを伝えます。ジェンダーにこだわるのは、2002 年に始めた DV 加害者プログラムで加害者に接した経験からです。加害者たちはとんでもない夫婦観、ジェンダー・バイアスを持っています。夫とは、妻とはこうあるべきという考えで、それは対等、平等な関係ではありません。男性優位社会の中で、自分は男だから特権をもっているという人ばかり。だから「ジェンダー」は外せない。そう最初から思いました。ただ伝え方は難しいです。

子どもたちは「男女は平等だ」「差別されたこともしたこともない」「そんなことは関係ない」と言いますよね。社会にはそういう性による差別がある、格差があるなんて知らない若い人たちに、実はすでに自分の中に刷り込まれている価値観があることに気づいてもらう。その気づきのきっかけの提供を一番工夫し、とても大事にしています。

正井：女性たちにとにかく DV に気づいてほしい、被害にあわない人生を選んでほしいという強い思いがあります。そのためにまずは力と支配の関係を最初に説明し、性暴力、ジェンダーについて教えています。「すてきな恋愛のルール」などの言葉を使って、どんな関係がいいんだろうという最後のまとめをしています。「恋愛」という言葉が出ると、さっきまで寝ていたような子までも全員がこちらを向くことが多いです。恋愛に対してこんなにも強い反応を示す様子を見て先生方もびっくりされています。あと、うちの特徴としては、DV 家庭にいる子どもたちにメッセージを伝えたくて、おとなの DV の実態も伝えます。それと、DV 家庭に育つ子どもたちの気持ちというスライドも見てもらいます。「DV は子どものせいではない」というタイトルのスライドには、あなたが決心すれば暴力のない人間になれるし、暴力のない家庭を築けるということを 3 つくらいの言葉で書いているんですが、ここの場面では多くの学校でシーンとなって聞いてくれます。

親の DV を経験してきた子から「一生結婚しないつもりでいたけどこの話を聞いて自分にも幸せな家庭を築けるんだと知って、どれほど勇気づけられたか」という感想を（特に男子中学生から）たくさんもらっています。私たちの活動は DV 防止でスタートしました。既婚女性の 4 人に一人 DV が起きている、そんな現状のなかで、DV 家庭の子どもたちへの大きな支援にもなっているというのがうちのプログラムのひとつの特徴になっているんだと思っています。

中田：今の時代であっても女子が NO を言えない、ということが気になっています。ロールプレイなどを増やして参加型でやっていくなかで、気持ちの言葉をたくさん書いたりとか、I メッセージのワークをしたり、なるべく生徒たちが自分で体験できるようにして進めています。DV の影響を受けている子、DV 家庭の子が本当に多いので、それを意識して「両親の DV は子どものせいじゃない」「あなたたちは自分の生き方を選んでいい」というメッセージを入れるようにしています。そして、これに対する反応

は多いんですね。プログラムの提供については、基本的なスライドを作って、ある程度研修をすることでだれでも同じレベルで話ができるよう工夫しています。中学、高校、大学と内容は少しずつ違ってきます。また、医療関係からの依頼、医学部や看護師養成コースなどでは、デートDV防止に関する話だけでなく、特に「あなたがたは第一発見者になりうるんですよ」ということを入れるようにしています。あとは、生徒が大事に手元に残してくれるようなハンドブックを用意し配布しています。

佐々木：大学生などの若い仲間がオリジナルのシナリオを作成します。中高生に今、何を伝えたいのか。それを書いていくんですけど、山口さんが言われた 4 つのポイントをつかみながら、若者の間で流行っていること、こういうところが訴える部分だよね、と、落とし込みをしながら作っていくプログラムです。ユースサポーター養成講座に大学生などが来るのですが、今年度は 8 人養成。その大学生の中にも、デート DV の被害、加害のその気づきがあったりします。また、自分のまわり、友達のなかに被害者加害者がいるということ気づいてくれたりします。それを後々に相談につなげることもやっています。ユースサポーターを育成するというよりは、デート DV について知ってもらって、まわりの現状に気づいてもらう。そんな大学生が中学生高校生に伝えていく…そんな活動になっているかと思います。

阿部：ワークショップ形式にこだわっています。参加してこそ気づきが生まれて、行動が変容していく。被害者にも加害者にも傍観者にもならないと いうことが目指せると思っています。理想はクラス単位ですが、実際には少なくなってきたいて、学年単位で実施することが多くなっています。エンパワメントかながわのプログラムの特徴は、CAP プログラムが基本になってできてきたということがあります。CAP は被害者の視点から作られたプログラムです。ですので、被害者の立場に立ち、そこに伝えているのは「人権」です。

デート DV 予防プログラムの中では「すべての人は暴力を受けずに生きていく権利がある」と伝えています。すなわち、それは「どんな理由があっても、だれからであっても、暴力を受けていい人はいない。あなたはとっても大切な人だよ」。私たちのプログラムのキーワードは「自分で自分を大切にしてい」…人権を伝えることをまずは土台にしています。



予防教育を普及していくことが私たちの課題です。

行政委託事業を広げていくことが大事だと思うのですが、今回の調査で、長崎県、兵庫県の数が多かったですね。行政などにどんな形で働きかけていったのか？そこでの苦労話も含めて教えてください。

中田：2004年のスタート当初は開催してもらえる学校を探すことでとても苦労をしました。知り合いを通してお願いし、実施した学校でアンケートを行って実態を知って、この次も…というような形でだんだんとリピーターが増えてきたという時期がしばらくありました。ちょうど自治体とNPOとの協働がはやり始めた2010年、長崎市との協働事業で中学校実施することができました。その1年間で長崎市の中学校の約半分以上に実施するということができたのです。翌年から長崎市の男女共同参画部門の事業として継続することになりました。それをきっかけに別の自治体からの委託も増え、民間の助成金で実施してきた高校での実績も増え、アンケートをまとめ結果もきちんと届けるということを続けていきま

した。2013 年、長崎県の県議会で県の教育長が「長崎県の高校生は 3 年間の中で 1 度は必ず予防教育を受けて卒業するようにしたい」という答弁をしてくれたのです。それを受けて DV を担当する子ども家庭課が予算をとって離島や郡部でも開催できるようになりました。すべてがカバーできているわけではなく、民間の助成金が大きな支えにはなっていますが、これで、各自治体の中学校は行政の委託で実施、県内の高校半数を毎年実施できているのはとても大きなことかなと思います。

正井：授業を始めたきっかけは、2006 年、兵庫県との 3 年間のパートナーシップ事業に応募して採択されたということです。3 年目は、県の教育委員会との協働事業として、約 30 校に実施することができました。県主催で夏休みに開催する県内の高校教員対象の人権研修も依頼されました。人権教育としてデート DV 防止授業を 240 校くらいの先生方の前で実施し、寸劇も先生自身が演じたので「こんなおもしろい研修はなかった」との感想もいただきました。翌年から 3 年程度は、教育委員会が予算をつけ、5 月頃に、県内の高校に実施の募集をかけたので、いろんな学校で実施できました。ずいぶん普及したし、今後は教員が実施すればよいとの理由で授業の予算がつかなくなると、高校での実施回数は減りました。現在は市町村の DV 担当の部署を通じて、その地域の中学校での実施が増えてきています。また、大学に対しても 15 校分として県の DV 担当部署からの予算がついています。文科省からデート DV 防止授業への予算がついて、県や市町の教育委員会が実施すれば、さらに授業は広がっていくと思うのにと残念です。

山口：このアンケートの数字にはアウェアの実施者の数字が反映されていないと思っています。アウェアでは活発に活動している方が多く、すべて網羅したら 1 年に 300 回以上は開催していると思います。ある県では、アウェアの認定者が講座を積極的に開催できるよう予算をつけてくれています。大阪、奈良、広島、北海道など各地にがんばっている認定者がいますが、こうした数が今回のアンケートには反映されていないことを、みなさんに知ってほしいです。

開催数を増やしていくということについては、行政と一緒にやっていくためには、地元で行政の中に入っていかにいい関係を作るかにつきますよね。部署としては、男女共同参画課、教育委員会、子育て支援課などたくさんあると思います。いろいろな形で行政と組んでやれるということではないでしょうか。

.....

実は数だけでなく、効果が一番大事なのではないかと思っています。

今回の実施状況調査をまとめてみて、どんな形が本当の意味で有効なのか？を計る必要性を感じています。理想的な対象（学年）についてどうお考えでしょうか？

例えば、今回ユースプロジェクトが実施した「恋愛に関するアンケート」では、デート DV 予防教育を受けたい学年で一番多かったのは「中 1」でした。10 代は中 1 との意見に実際の講師の皆さんはいかがでしょうか。

.....

正井：対等な関係を築こうということだったら、中 1 で。デート DV の講座に性教育も入れるということでも中 2 かな。避妊や性感染症を伝える性教育を入れ込んでいける場面が少ないので、子どもの発達段階を考えると微妙ですが、高校では遅いと思います。今まで出会ったなかで 16 歳の子ですが「私の周囲では中 2 くらいでセックスしている子」と聞いたことがあります。

山口：アウェアも最初高校でやっていたんですが、実施者が「それでは遅い、中学でやらないと」って。中学でやるとそれでも遅い「じゃあ小学校高学年でやらなくちゃ…」となっていくます。聞いてくれた子どもたちの中には何回も聞きたいという子も出てきます。発達段階に応じていろんな形で、何回も開催することが理想ではないかと思います。

佐々木：感覚としては二次性徴が始まった、いわゆる思春期に入った子が多くなる中学校 1 年、2 年は、他人事ではなくて自分事としてとらえられる感じがしています。岩手で私が予防講座をやっている数としては中学校が 7 で、高校が 3 くらいなんです。高校に行くと「こんなの遅いよ」という声を聞くのと同時に「知らなかった」という子もまだまだいるので、高校で開催する意味も大きいと思います。高校生は自分の考えも確立されてきますので、自分のしていたことが「デート DV かも？」と加害に気づく男子生徒も出てきます。そんな時は相談に乗ることもあるし、プラス効果もあるのではないかと思います。

中田：性教育の部分を入れると、ある程度学校で性教育がされた中 3 くらいが効果的ではないかと思っています。高校になると半数以上で交際経験があり「自分たちのことに首をつっこまletakない」などの反発もあるし、本当の気持ちを出しにくいように感じます。感想を読んでみて男子も女子もたくさんのかことを書いてくれるのが中 3 ですね。高校生に実施した時に「中学でもやったけれど、もっと深く考えられてよかった」という声もよくききます。最近、2 回目だという子が多くなっていて、中学から高校へと成長していく中で理解や感じ方も変わってくるんだなと思わされます。確かに発達段階でいろいろな形で触れるのが一番いいと思いますが、ターゲットとしていくのをどの年代かということに対しては、中 3 という感覚を私たちの仲間うちでは持っています。

阿部：今回の結果では 68%、つまり 7 割が高校生への実施という結果が出ました。でも私たちは、もし 1 回ということであれば、目指すところは義務教育期間である中学生ということを感じています。

正井：以前、行政に話していた時に「寝た子を起こすな」とか「中学には早い」と言われていたのですが、先生たちの協力を得て中学校 8 校くらいやったことがありました。

その時「交際する前に学べてよかった」という感想がすごく多かったですね。それを行政関係者に見せたら「喫煙教育と一緒に」と言われました。「タバコ吸う前がいい」ということなんです。子どもたちの生の声を校長先生だけの研修の時に紹介したところ、心に響いて中学校での開催につながったという経緯があります。生徒の声を届けることは大事だと思います。



阿部：中学生 1 年生の保健体育の教科書の欄外のところに「デート DV」という言葉の紹介が出ていました。先生方の認識も変化していくのではないのでしょうか。

山口：学校で講座の時間を確保するのは先生方もとても苦労されていることだと思います。でも、いろいろな時間を使えるということも知っておいてほしいと思います。先生方には、例えば、ロングホー

ムルーム、人権教育の授業、性教育、保健講話、道徳の時間、総合学習、セーフティ教室、ハラスメント防止、キャリアプランなど進路指導の時間や、PTA などでも取り上げてもらうなど、柔軟に考えれば防止教育の時間が作れるということも伝えたらどうでしょうか。

佐々木：中学生の場合、高校入試が終わった後、卒業式までの間に特にすることがないと伺ったことがあります。その時期に中学校へ行けばいいなあと考えています。高校へ行くと新しいコミュニティになりますよね。それがとても不安だと先生も思っていて、ぜひ開催してほしいと要請がありました。卒業という時期をとらえるのもいいのではないのでしょうか。

講師についてですが、10 代の子もたちの心に響きやすいのは、近い年代からの言葉やメッセージだと思います。学生と一緒に活動する工夫をされている佐々木さん、その効果をどう考えられていますか？

佐々木：中学生、高校生には、より年齢の近い人の言葉の方が耳に入っていくと感じています。たくさんの説明や話の中で心に残っているのは大学生が言ったあの一言…ということもあります。アンケートの回答にも見られることから、年の近い世代を予防教育に積極的に取り入れいくことは効果に結びつくと思いますね。ただ、大学生ですので就職で離れるメンバーも多くなってきます。卒業して講座には参加できなくなりますが、いろいろな職種について今度は情報を送ってくれて、学生のメリットは大きいなと感じています。

いろいろ苦労があるとは思いますが、活動の中でやりがいを感じる時、あるいは皆さんの原動力ってどんなことか？教えてください。

子どもたちからの声が活動のエネルギー

山口：今は私が実際に講座で若者の前に立つことはないのですが、皆さんの声を聞くと、かつて自分が実施していた時のことを思い出します。子どもたちを DV の、あるいはデート DV の加害者にも被害者にもしない、この 1 点ですね。そのためにどうしたらいいのか気がついてほしい、知ってほしい…それを受け止めてもらえたと思える反応が返ってきた時、喜びを感じますよね。それこそがエネルギーになるのではないのでしょうか。

正井：「これから平等な社会を築くのは僕たちだ」「今日の授業は今まで受けた中で一番有意義でした」そんな生徒たちの感想を聞いた時、本当に嬉しかった。生徒たちの声こそが活動の原動力になっています。

中田：話していて、生徒さんたちの表情、食い入るように聞いてくれていることがエネルギー源となります。「両親の DV に自分が責任がないとわかってよかった」「今、自分がデート DV を受けていることに気が付いた。なんとかしていきたい」「相談が大事だとわかった」という声があったり、男子から「僕は交際相手に絶対に暴力は振るわない」「男女平等な社会を自分たちが作っていくことが大事だ」そんな率直な声がたくさんあること、ああ行ってよかったと、元気をもらっています。

佐々木：私もみなさん同様、子どもたちからの声には力づけられています。講座をやりながら途中聞きたくなかったら、会場の外にでてもいい、その時は先生もついていくと、先生にも伝えて実施しているのですが、実際に DV を受けていると気がついた生徒が会場から出ていくことがあるんですね。そういう時、気がついてよかった、やっていてよかったと思います。その一つひとつが私の原動力です。また、育てている大学生がデート DV を知って、気づいていく・・・一緒に学び気づけた仲間が増えていくことにやりがいを感じています。

阿部：暴力をなくしていくということは予防するということ。予防するということは、私は、加害者が生まれないということだと思っています。私たちは「暴力はダメ」ということは一切言いません。「あなたは大切な人」「暴力を受けていい人はひとりもない」そう伝えています。この伝え方で「DV は絶対したくない」「加害者になりたくない」との感想を子どもたちが書いてくれることが、私にとっての原動力かなと思います。

私たちは、デート DV 予防教育を普及していくことを国や行政に働きかけたいと考えています。どんなことを働きかけたいですか？そのために、デート DV 防止全国ネットワークは何をしたらいいと思いますか？

予防教育の効果をアピールする場に

中田：デート DV 予防に関しては、国なり行政が熱心に取り組んでほしいと思います。熱心に考えてくださる行政の方もいますが、それが一般的ではない。そんな現状が残念ながらあると思うんです。私たちに何ができるのでしょうか。まずは実態を知ってもらう。そして、予防教育の効果。効果測定って難しいのですが、やっぱり効果があるということを示していかなければならないと思います。

デートDVは軽く考えられてしまうところがあるので、それが、夫婦間のDV、虐待、貧困にもつながっていていることをきちんと示し、アピールしていく場が必要だと思います。ネットワークってそういう役割も果たすことができるのではないのでしょうか。その声を国会議員に届けることなども必要なのではと思っています。

どこにどう働きかけることが効果的なのか

山口：働きかけるのも、国が行政かで、ちょっと違ってくるのではないのでしょうか。

すでに行政に働きかけている人たくさんいますから、そこはそこで、開催回数を増やすという働きかけを推し進めることができます。国になると、DV 防止法にデート DV を入れるのか、あるいはデート DV 防止法を作るのか、どこの省に働きかけるのか、法律との兼ね合いもあります。今後、議論が必要なところですね。どこにどう働きかけることが効果的なのか、話し合いを持たなくてはと感じています。

デート DV の実態を知ってほしい

正井：高校生は恋人と同居していませんが、実態としてはすごくひどいことをされているんです。怖くて別れられないとか。DV 防止法に配偶者だけではなく、恋人も含んでほしい。DV だけでなく、デートDV も犯罪なんですよ。デートDV はあいまいですね。どれだけひどいことが 起きているのかが知ら

れていないです。若い人にはよくあることだと軽く流されていると思います。女子大で講座をして6割くらいの学生が「受けていたことがデートDVだったことを始めて知った」と答えています。「結婚しようと思ったけれど、立ち止まってみよう」そう書いている子もいて、その数の多さに驚いたんです。「恋愛」という言葉の中にどれだけ危険なことがあるのかを知らされていない。JKビジネス、リベンジポルノなどは注目されてきてはいますが、若い世代の日常的な恋愛関係に潜む暴力をどうしたらなくせるか、社会全体で取り組むべきだと思います。

法律にデートDVを盛り込んでいく動きも

佐々木：私も法律の中にデートDVということ盛り込むことが必要かなと思っています。DV防止法の中に交際の男女間、交際中に起きている暴力についても規定できることです。もうひとつは児童虐待防止法。いずれにしても法律ができれば文科省も動かないわけにはいかない、教育をしなればいけない、そんな状況を作っていければと思います。

予防教育の普及のため共に力合わせて

阿部：中田さんがおっしゃったように実態を調べ、効果を示していく必要があります。それから、DVや虐待との関連も調べる必要がある。予防教育の普及を国や行政どちらにも働きかけていくためには、対象の学年や人数、時間など、どういう形で実施していくのが効果的であるかを私たち自身が見つけていくことが大事であることを、この調査を実施してみて特に感じています。

今日、みなさんとお話しさせていただいて、方法論はそれぞれ少しずつ違っているけれど、目的は同じであることを改めて実感できました。私たちは、お互いの違いを認め合いながら、その目的のために力を合わせていきたい、そう思いました。



2013年（第1回）▲



2018年（第5回）▶



デートDV予防教育実施状況調査報告書

I 調査の概要

1. 調査の目的

全国各都道府県でのデート DV 予防教育の実施状況を調査することで、デート DV 予防教育のさらなる普及を図ることを目的とした。

2. 調査の方法

① 調査対象

民間団体（個人）または行政機関が、学校（小学校・中学校・高等学校・大学・専門学校等）の授業時間内に行うデート DV 予防教育（学校内の教員が行う授業や冊子等を配付するだけものを除く）（デート DV という言葉を使用していることを条件とする）

委託事業等で重複の回答を避けるため、原則として予防教育の実施者（講師）が回答することとし、講師が回答しない場合のみ、委託元が回答することとした。

② 調査対象期間

2016 年 4 月～2017 年 3 月の実施状況

③ 調査実施期間

2017 年 11 月～2018 年 1 月

④ 調査の方法

入力フォーム（Excel）に記入し、メールで返信する方法を取った。

3. 調査の内容

下記の内容を調査項目とし、集計は都道府県ごとに行うこととした。

基本情報（非公開）：予防教育の実施者（団体）の名称・住所・連絡先・担当者名

実施場所：都道府県名

実施対象：小学校・中学校・高等学校・大学および専門学校、その学年

実施実績：実施した回数・受講者の人数

実施方法：ワークショップ形式・講義形式・その他

実施単位：クラス単位・学年単位・学校単位・その他

実施時間：45 分以上 60 分未満・60 分以上 90 分未満・90 分以上 120 分未満・120 分以上

費用の負担：学校・行政・民間・その他

費用について：無償または、交通費を含んだ 1 回ごとの料金

プログラムの特徴や実施にあたり工夫していること：自由記述

実施にあたり苦勞していること、改善したいこと、要望等：自由記述

Ⅱ 調査結果

1. 回答者について

2017 年 3 月に、デートDV 予防全国ネットワークが作成した「デートDV 防止全国マップ」に掲載している団体および機関 80 箇所に、メールにて依頼したところ、25 団体（個人を含む）から回答を得られた。

回答者の内訳

都道府県男女共同参画担当課 1 市町村男女共同参画担当課 1

都道府県男女共同参画センター等 6 市町村男女共同参画センター等 2

その他 N P O 法人 10 任意団体 4 個人 1

回答者の所在地（都道府県）

北海道	北海道	0		滋賀県	0
東北地方	青森県	0	近畿地方	京都府	0
	岩手県	1		大阪府	3
	宮城県	0		兵庫県	1
	秋田県	0		奈良県	0
	山形県	0		和歌山県	1
	福島県	1		三重県	1
関東地方	茨城県	0	中国地方	鳥取県	0
	群馬県	0		島根県	0
	栃木県	0		岡山県	0
	埼玉県	0		広島県	1
	千葉県	1		山口県	1
	東京都	2	四国地方	徳島県	0
	神奈川県	1		香川県	0
中部地方	新潟県	1		愛媛県	0
	山梨県	0	九州地方	高知県	0
	長野県	1		福岡県	2
	富山県	0		佐賀県	1
	石川県	0		長崎県	2
	福井県	0		熊本県	1
	岐阜県	0		大分県	0
	静岡県	3		宮崎県	0
	愛知県	0		鹿児島県	0
				沖縄県	0

2. 調査結果

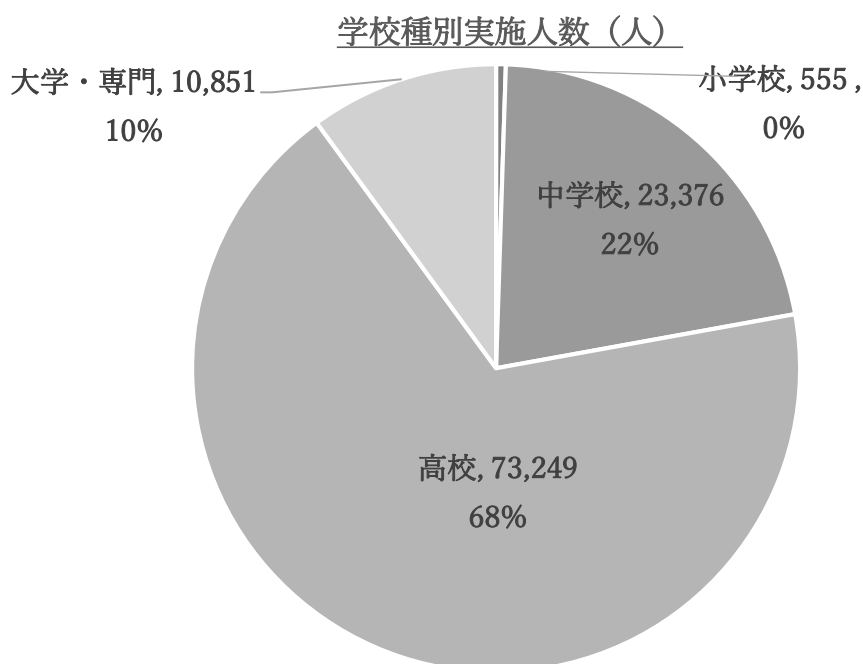
全国には、現在 100 から 200 の民間団体や行政機関がデートDV予防教育を実践していると思われます。

この調査結果は、あくまで今回回答のあった 25 団体（個人）の結果を集計したものであり、全国のデートDV予防教育のすべてを網羅しているものではありません。

① 受講人数

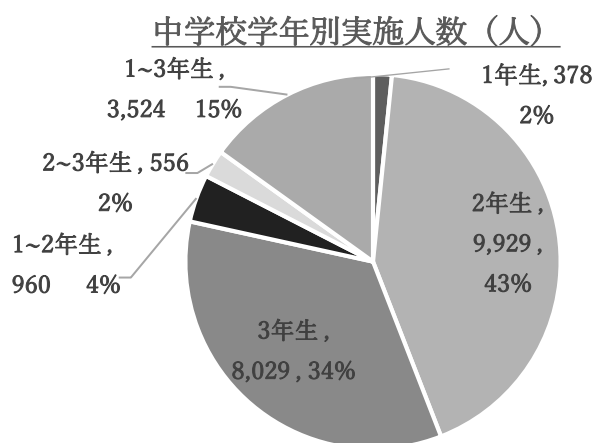
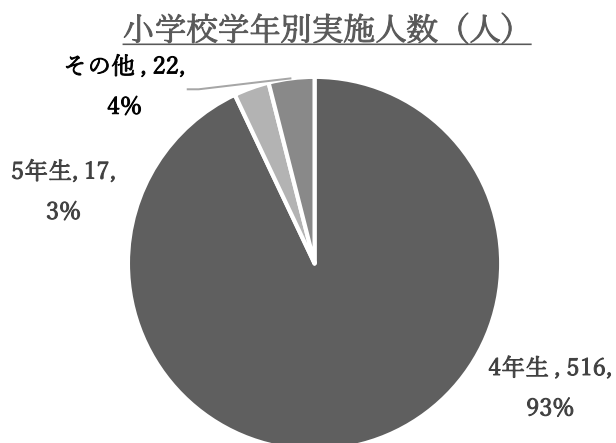
2016 年 4 月から 2017 年 3 月までに、回答のあった 25 団体が実施したデートDV予防教育を受講した児童・生徒・学生は、108,031 人であった。

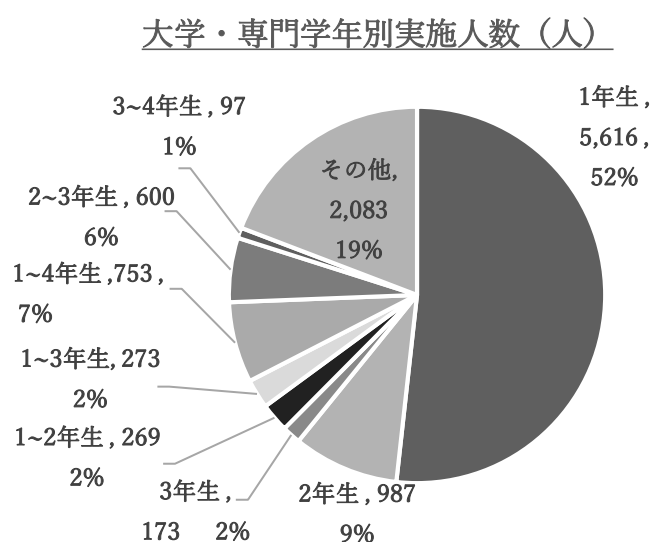
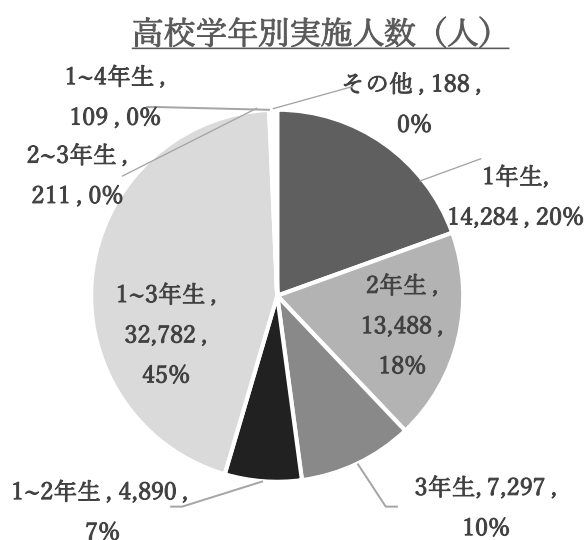
学校種別にまとめると、高校が一番多く 73,249 人、次いで中学校 23,376 人、大学・専門学校 10,851 人、小学校 555 人となった。



学年別の受講人数を学校種別ごとにまとめると以下ようになった。

受講人数が一番多かったのは、高校で 1～3 年生（学校単位）での実施で 32,782 人であった。

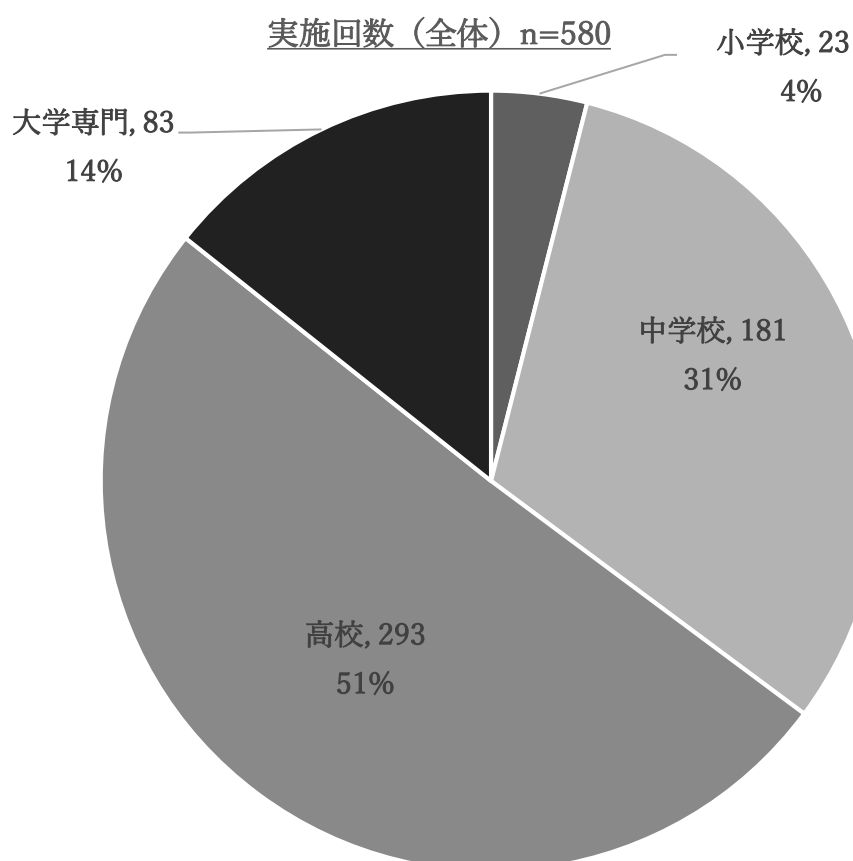




② 実施回数

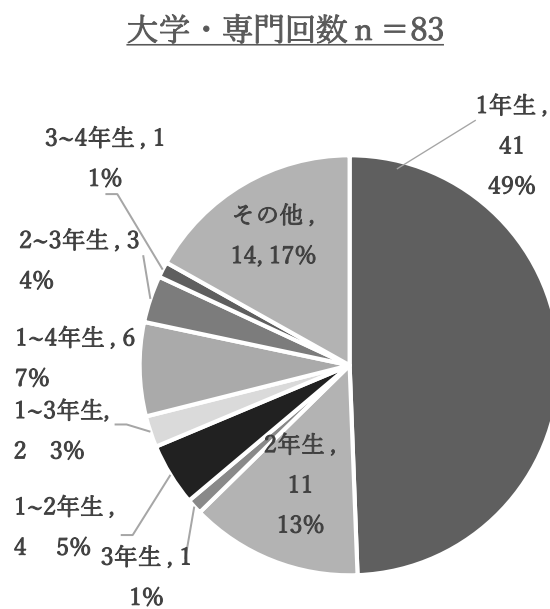
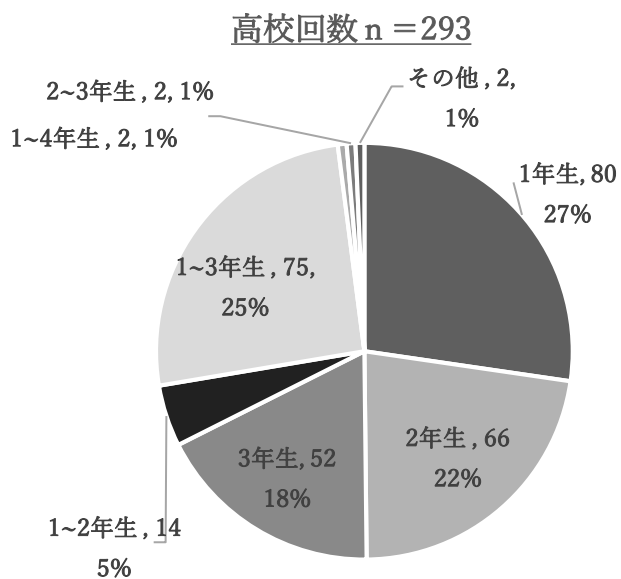
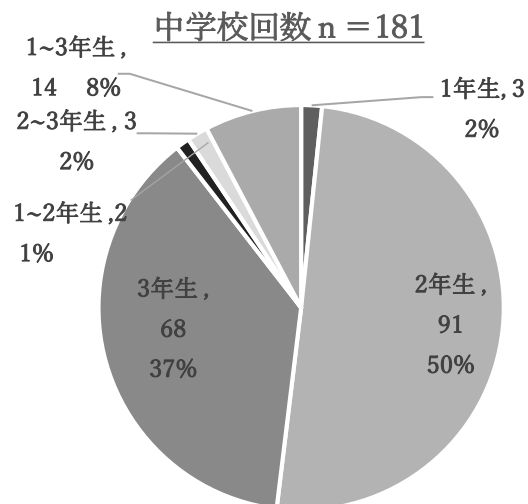
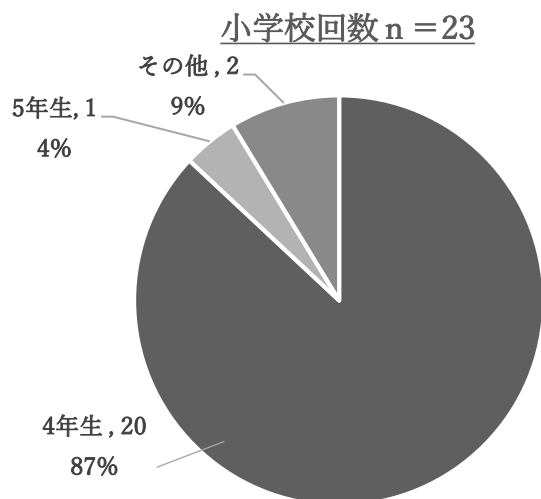
2016 年 4 月から 2017 年 3 月までに、回答のあった 25 団体が実施したデートDV予防教育は総数 580 回であった。

学校種別ごとでは、高校が一番多く 293 回、次いで中学校 181 回、大学・専門学校 83 回、小学校 23 回となった。



学年別の実施回数を学校種別ごとにまとめると以下ようになった。

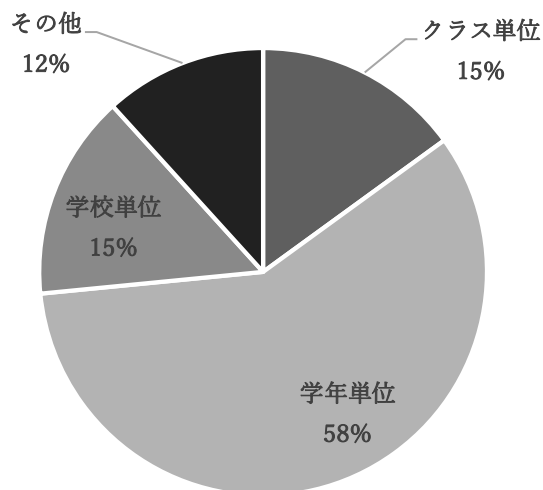
実施回数が一番多かったのは、中学2年生で91回、次いで高校1年生80回であった。



③ 実施単位

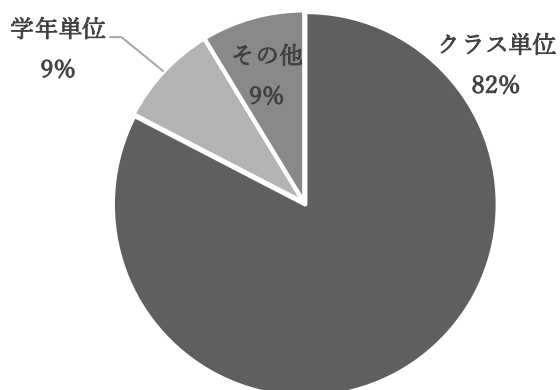
デートDV予防教育の実施単位をクラス単位・学年単位・学校単位・その他として聞いたところ、一番多かったのは学年単位 54%、次いでクラス単位 19%、学校単位 15%、その他 12%であった。

実施単位別回数（全体） n = 580

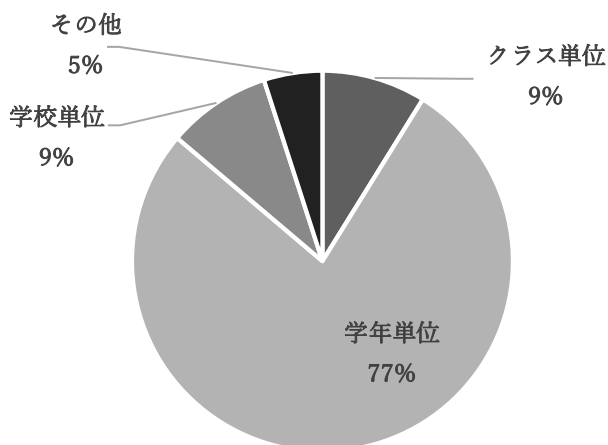


学校種別ごとの実施単位については以下ようになった。小学校ではクラス単位、中学校では学年単位、高校では学年単位、大学・専門学校ではクラス単位が一番多かった。

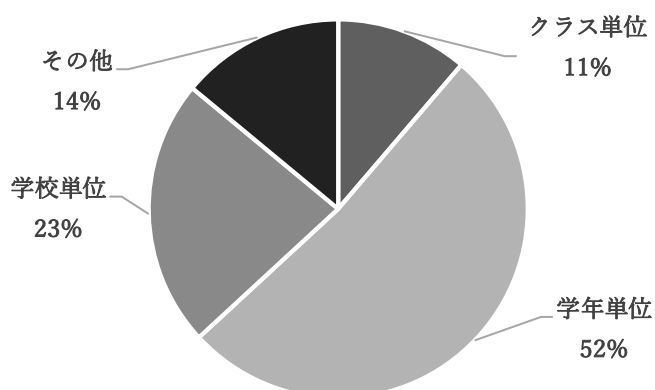
小学校回数 n = 23



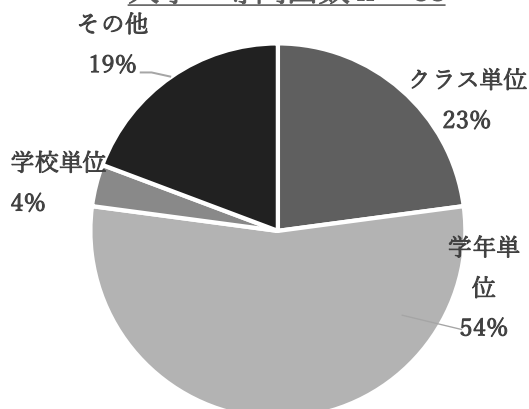
中学校回数 n = 181



高校回数 n = 293

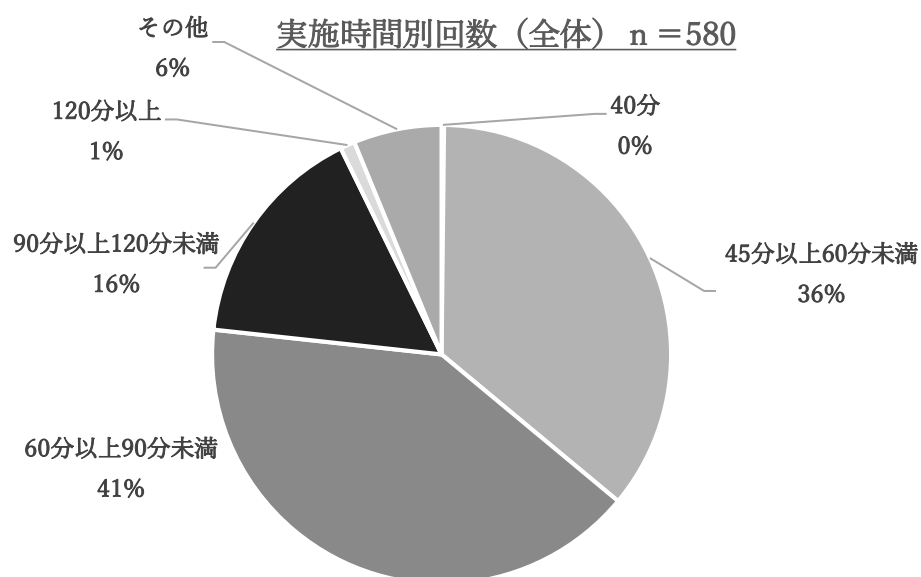


大学・専門回数 n = 83



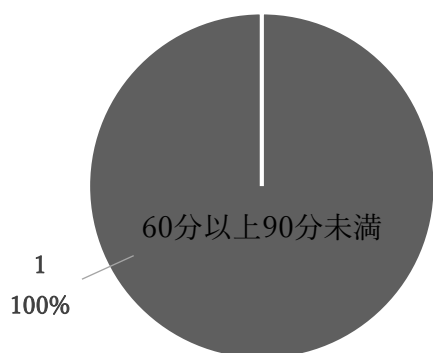
④実施時間

1回あたりのデートDV予防教育の時間を45分以上60分未満、60分以上90分未満、90分以上120分未満、120分以上、その他とし聞いたところ、一番多かったのは、60分以上90分未満の41%、次いで45分以上60分未満36%、90分以上120分未満16%、その他6%、120分以上1%となった。

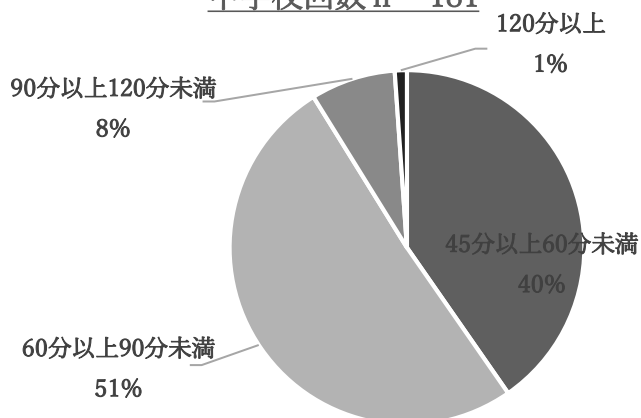


学校種別の実施時間については以下ようになった。小学校では、60分以上90分未満が100%、中学校では60分以上90分未満が51%、高校では45分以上60分未満が45%、大学では60分以上90分未満が53%と一番多かった。

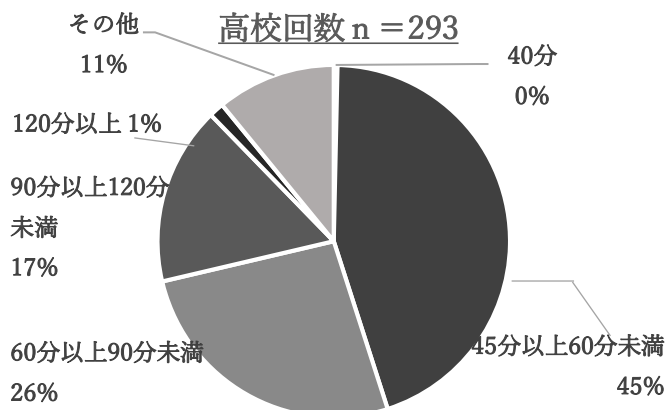
小学校回数 n = 23



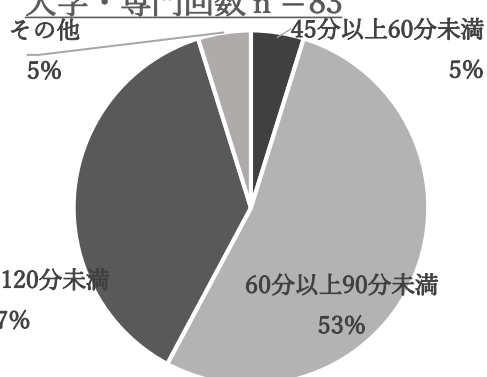
中学校回数 n = 181



高校回数 n = 293

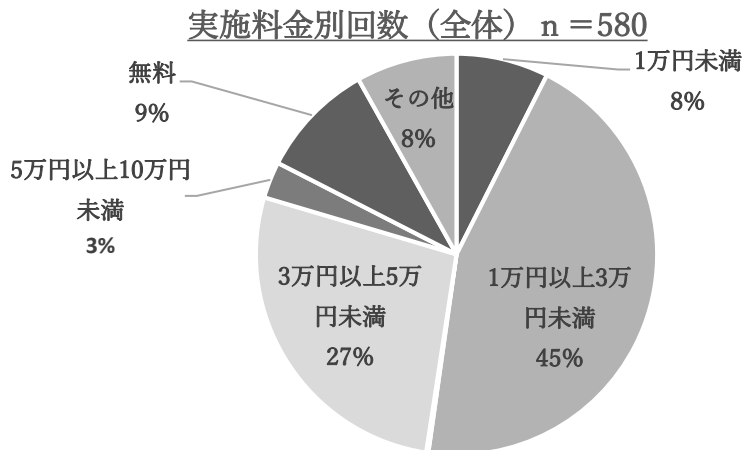


大学・専門回数 n = 83



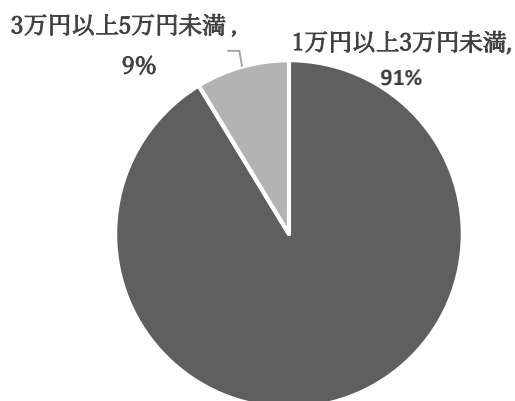
⑤ 実施料金

1回あたりのデートDV予防教育の料金（交通費を含む）を無料、1万円未満、1万円以上3万円未満、3万円以上5万円未満、5万円以上10万円未満、その他とし聞いたところ、一番多かったのは、1万円以上3万円未満の45%、次いで、3万円以上5万円未満28%、無料9%、その他8%、1万円未満7%、5万円以上10万円未満3%となった。

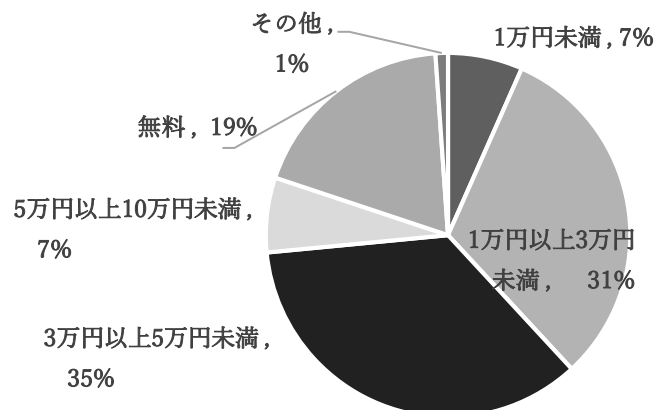


学校種別の実施料金については、小学校では1万円以上3万円未満91%、中学校では3万円以上5万円未満35%、高校では1万円以上3万円未満48%、大学では1万円以上3万円未満51%となった。

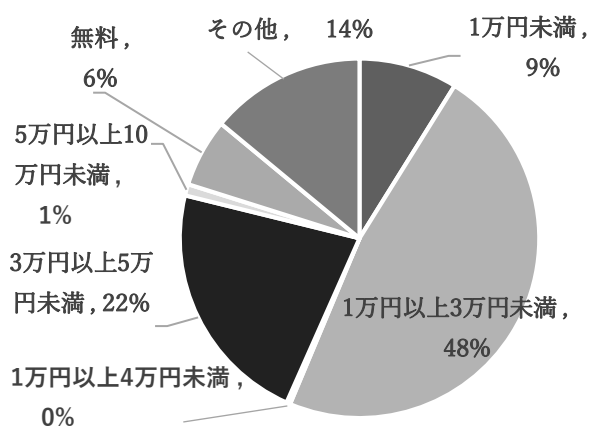
小学校回数 n = 23



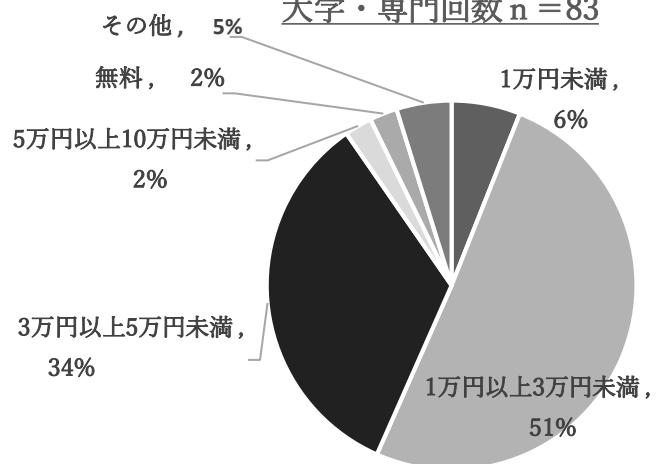
中学校回数 n = 181



高校回数 n = 293



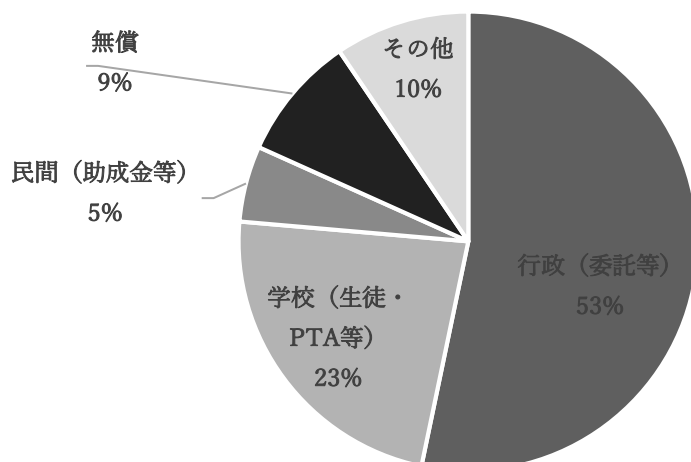
大学・専門回数 n = 83



⑥ 費用負担

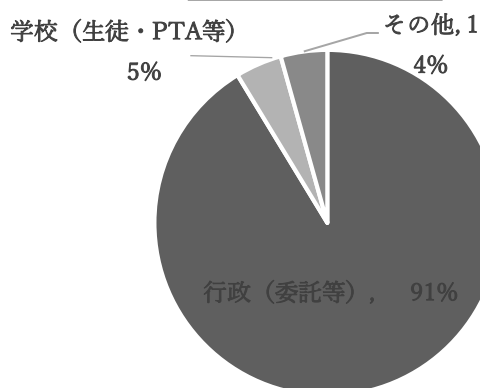
デートDV予防教育の費用負担を、行政（委託等）、学校（生徒・PTA等）、民間（助成金等）、無償、その他に分けて聞いたところ、行政が一番多く53%、次いで、学校23%、その他10%、無償9%、民間5%となった。

費用負担（全体） n = 580

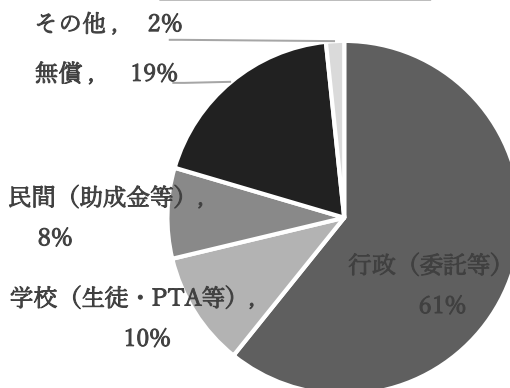


学校種別ごとの費用負担については、いずれも行政が一番多く、小学校で91%、中学校61%、高校で43%、大学で62%だった。

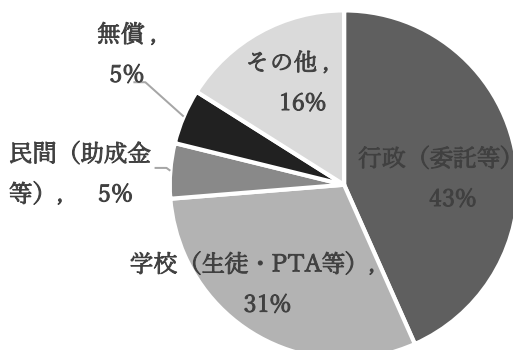
小学校回数 n = 23



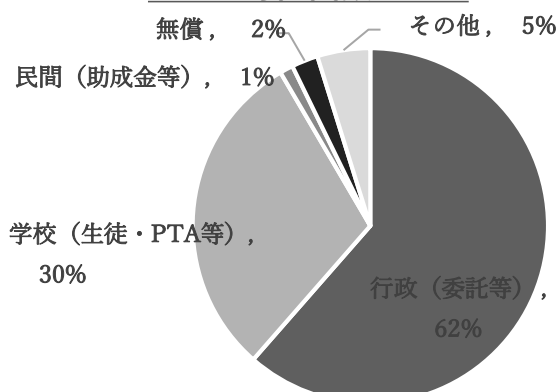
中学校回数 n = 181



高校回数 n = 293



大学・専門回数 n = 83



回答者に、行政の委託元を聞いたところ、回答があったのは、以下であった。

市町村男女共同参画担当課 16、市町村男女共同参画センター 9、都道府県男女共同参画課 9、市町村その他課 6、市町村教育委員会 5、都道府県男女共同参画センター 3、都道府県教育委員会 3、都道府県その他課 1

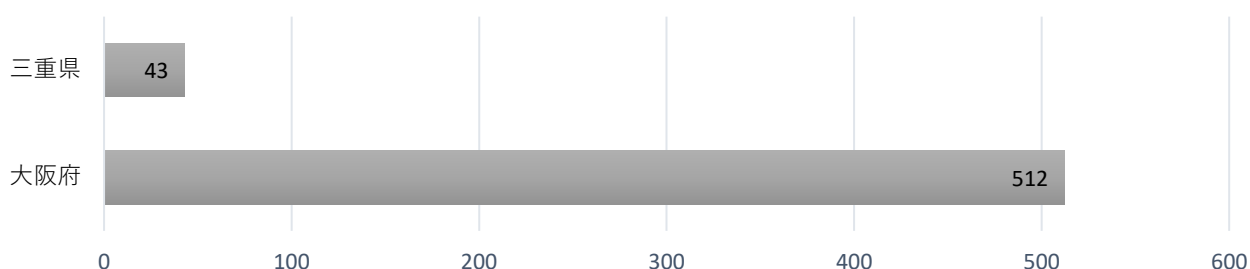
また、民間からの助成金では、国際ソロプチミスト、社会福祉協議会、コミュニティ財団などが挙げられた。

⑦ 都道府県別受講人数

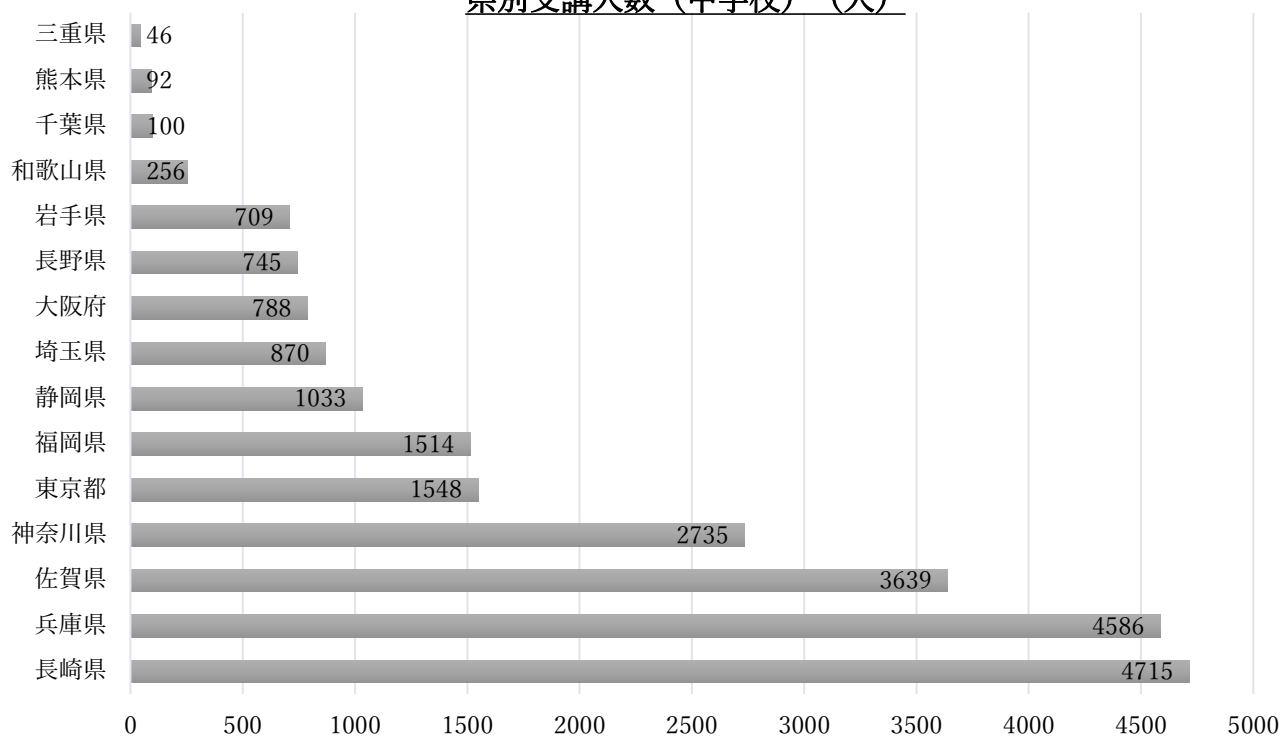
都道府県別の受講人数を学校種別ごとにまとめたところ、以下のようになった。

一番多かった都道府県は、小学校で大阪府、中学校で長崎県、高校で千葉県、大学・専門学校で兵庫県だった。

県別受講人数（小学校）（人）

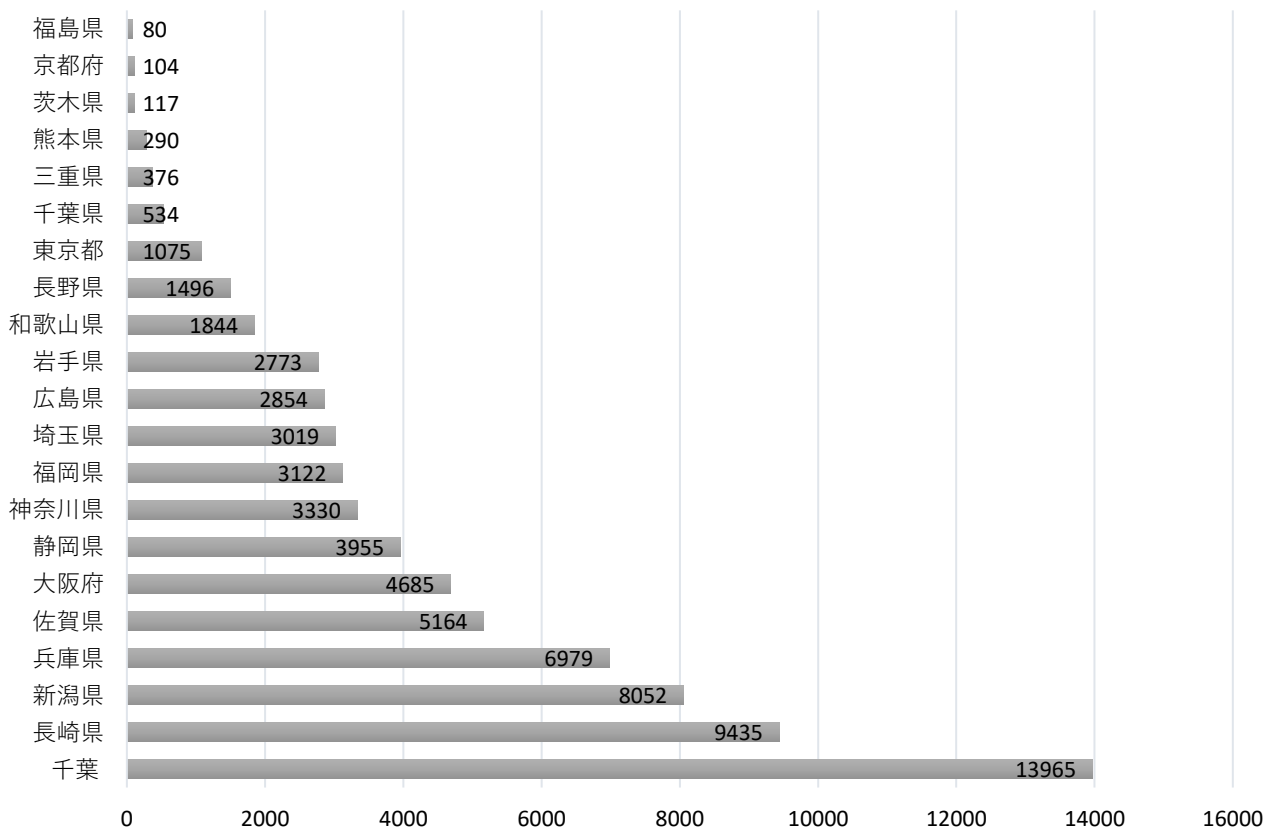


県別受講人数（中学校）（人）

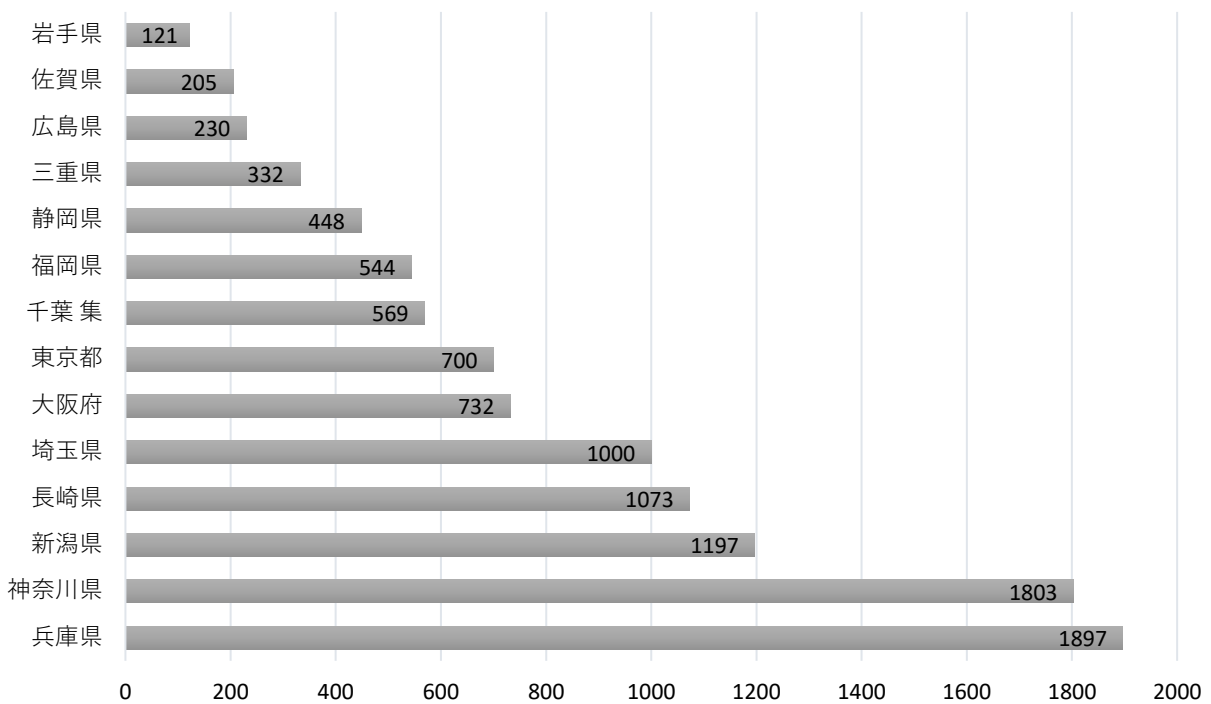


※この調査結果は、あくまで今回回答のあった 25 団体（個人）の結果を集計したものであり、全国のデートDV予防教育のすべてを網羅しているものではありません。

県別受講人数（高校）（人）



県別受講人数（大学・専門）（人）

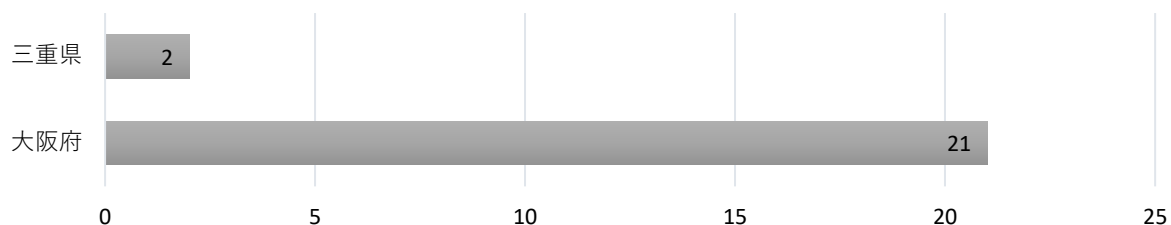


⑧ 都道府県別実施回数

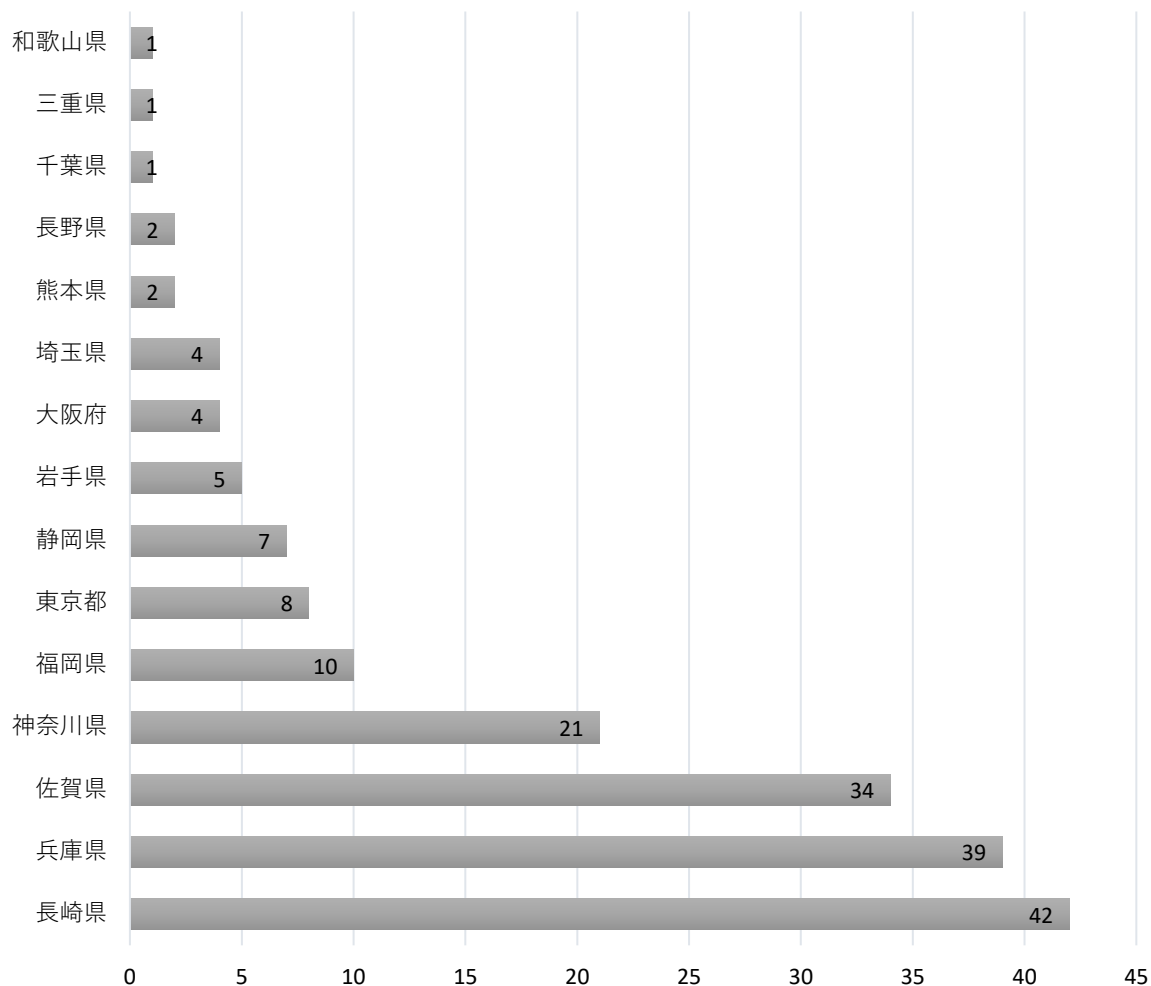
県別の実施回数を学校種別ごとにまとめたところ、以下ようになった。

実施回数で一番多かったのは、小学校で大阪府、中学校で長崎県、高校で長崎県と神奈川県、大学で兵庫県だった。

県別実施回数（小学校）（回）

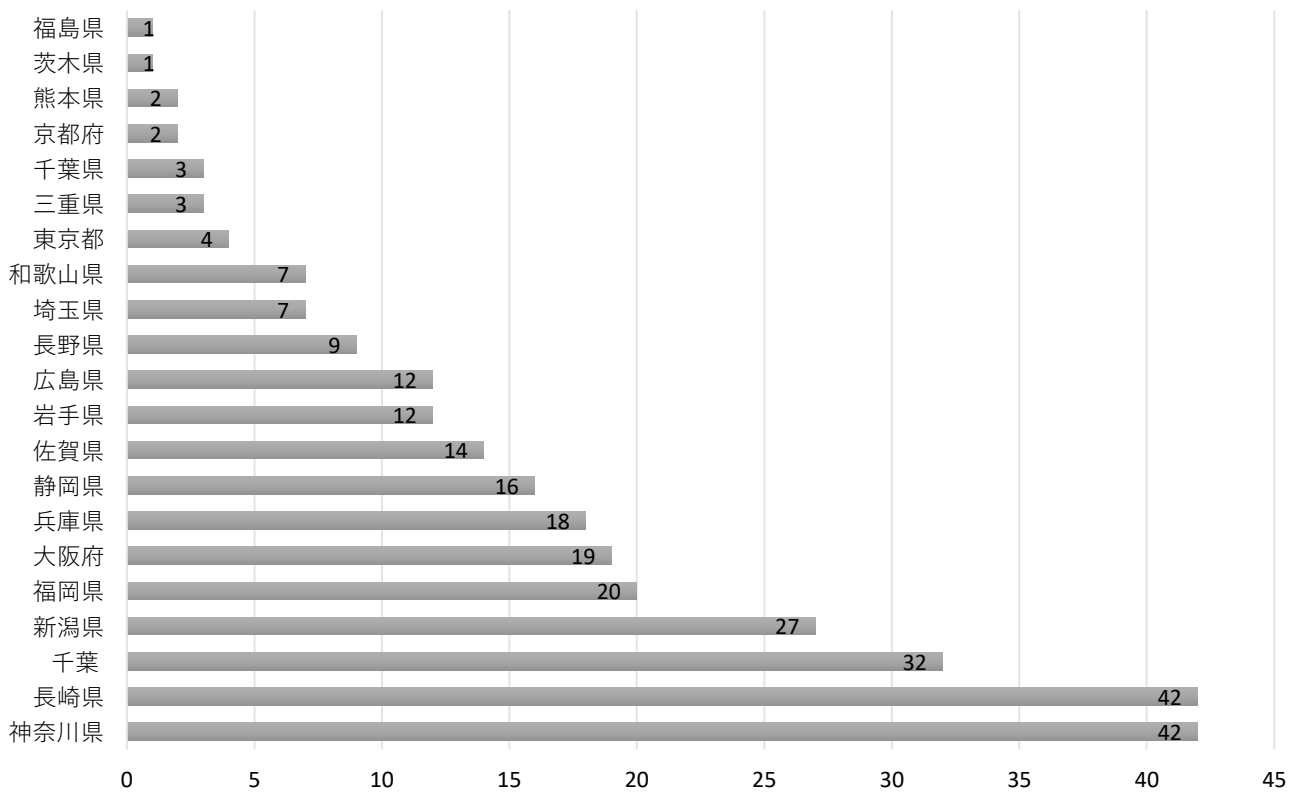


県別実施回数（中学校）（回）

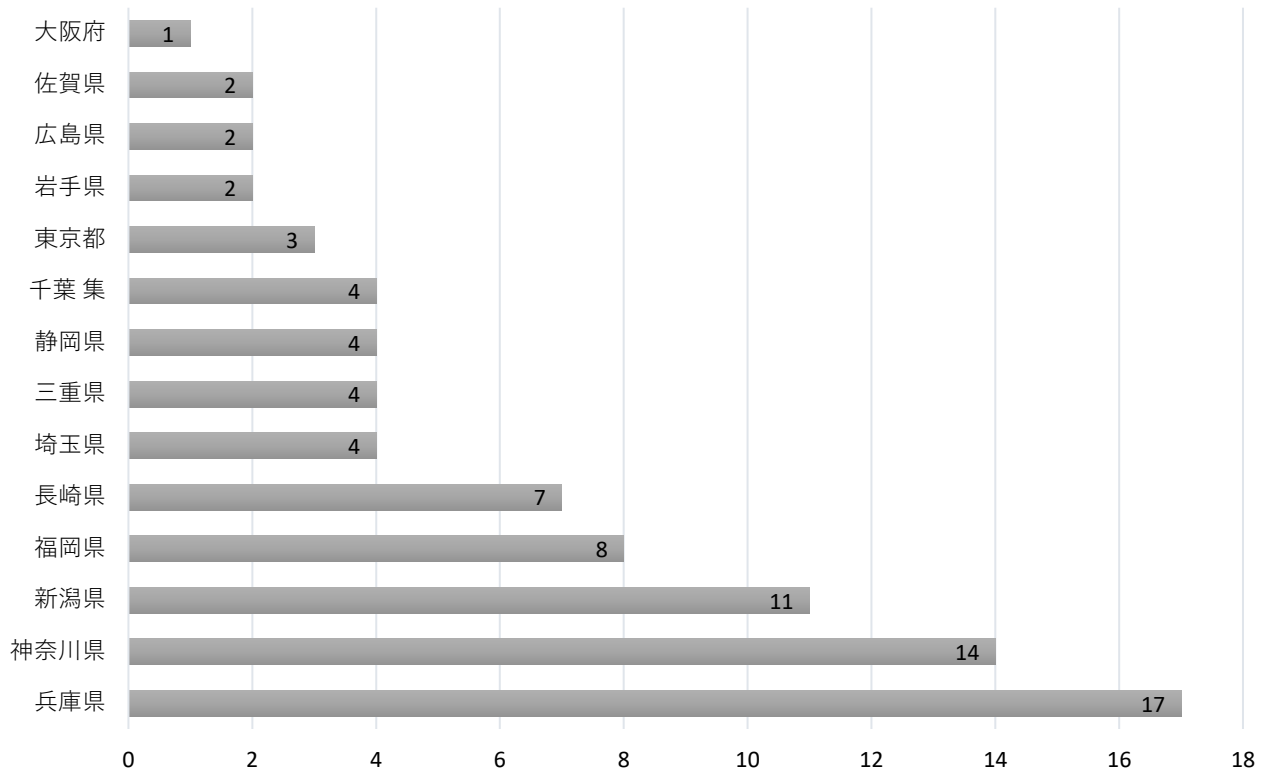


※この調査結果は、あくまで今回回答のあった 25 団体（個人）の結果を集計したものであり、全国のデートDV予防教育のすべてを網羅しているものではありません。

県別実施回数（高校）（回）



県別実施回数（大学・専門）（回）



あなた（貴団体）のプログラムの特徴や実施にあたり工夫していることをお書きください。
参加型ワークショップ形式によって、参加する生徒自身が被害者にも加害者にも傍観者にもなりたくないという気持ちをひきだしている。中学生・高校生・大学生・教職員向けにそれぞれのプログラムを開発した。さらに、知的障がいのある人へも実施している。学年単位でも実施するが、クラス単位が効果的だと考えている。クラス単位の場合、スタッフ3～4名、学年単位の場合、4～6名を派遣し、参加者一人ひとりに声をかけることを大切にしている。
5年間で県内全高等学校、大学等で実施を目指している。
2名で担当し、講師間でフィードバックをすること、DVD、パワーポイントなど視覚的な工夫をしている。時間があればロールプレイやワークなど参加型の内容を盛り込んでいる。
中学生に対する講座なので、具体的な例を多く上げ気づけるようにしている。暴力という言葉からは実感できにくいので具体例を出している。もしも自分や友だちのみに起こったときにどうすればいいか、予防に力を入れている。
平成23年度に県の教育委員会、県こども家庭課と協働でプログラムを作り、県内の高校、中学に冊子と教材データを配布したものを基本にしている。パワーポイントを用いているので、予防教育を実施したい人が、一定の研修を受けることで、比較的实施しやすいプログラム内容になっている。内容は、毎年更新している部分があるので、研修受講者にはパワーポイントデータ、生徒への配布資料をセットで配布し、使用できるようにしている。
PPTのスライドショーやロールプレイを通して、デートDV予防のみならず、友達家族職場など様々な人間関係のあり方について考え学ぶプログラムです。非暴力の重要性、心が傷ついた時のケアの方法、相手も自分の大切にすることをコミュニケーションなどを伝えていきます。またデートDV被害者へどのように対応するか、親にDVがある場合の子どもへのメッセージなども伝え、傷ついている子どもたちへのケアとなるようなメッセージもそっと含めています。
パワーポイントで作成したスライドを用います。（文字は少なく、強調したい事柄やデータを表やグラフで分かり易く表します。）分かり易いロールプレイを、学生さん・生徒さんに演じてもらいます。新しい情報に敏感でいるようにしています。インタビュー形式で、参加者の意見や考えを聴くようにしています。ジェンダーの視点を必ず入れるようにしています。暴力を容認する理由は何一つない、暴力を受けていい人もないと伝えます。デートDVを切り口にしますが、自分を大切にし相手を尊重することは、人生のどんな場面にも必要な価値観であることも強調します。
様々な家庭環境や親の価値観のもとで育っている子どもたちがいる学校教育現場で実施。人権の視点からエンパワメントの関わりで、性を語る。利害関係のない複数のスタッフが生徒たちに寄り添い、本音を語りやすい環境づくりを意識している。そのため、個人的な質問や相談を受けることもある。ワークショップ形式で、子どもたちにとって身近なテーマをロールプレイにより伝え、対象者に受け入れられるようなことば・映像・手法・グッズを用いる。知識を伝えることだけにとどまらず、本人の利益となり行動変容へとつなげることをめざしている。
県内でアウェアのデートDV防止プログラム・ファシリテーター養成講座を修了された方を講師として登録、派遣している。基本はアウェアのプログラムを使用。高校生にはDVDの視聴、他クイズ形式、ワーク等飽きない内容となるよう工夫している。また、三重県内で高校生・大学生を対象に行った「デートDV」に関するアンケート調査の結果を盛り込むなど、身近に感じてもらえる資料を作成するよう心掛けている。各学校の状況や要望に合わせてプログラムを組んでいる。
・小学生対象デートDV予防「みんな活き活きプログラム」は実践者養成講座を開催し、他団体によるプログラム普及もめざしており、四日市市と八尾市にて取り組みが始まっています。・中高大学生へのデートDV予防教育出前授業では、事前意識調査アンケートを実施し、その集計データをパワーポイントに反映させた授業に取り組んでいます。・どの年齢を対象にしても、人権とジェンダー規範を柱に授業を組み立てています。
人権の問題として取り組むこと。自分自身を大切に、かつ相手の気持ちを尊重することを伝えるようにしている。自立した対等な関係の良さを伝えるために、ロールプレイなどを盛り込んだり、漫画を利用したりしている。つき合った経験のない生徒さんにも、他人ごとではないと思ってもらえるように常に意識している。また、学校ごとに抱えている問題、先生の要望が異なるため、学校の状況を丁寧に聞くことを心掛けている。
寸劇を入れている一先生に寸劇をしてもらうので、生徒がたいへん関心を持って見てくれる。寸劇は被害を受けた女子生徒とその友人 加害をした男子生徒とその友人という設定で1) 劇であっても、加害が行われるところは見せない2) 友人に打ち明けるモデルを見せる3) 友人の力になるモデルを見せる ということができる。最後の寸劇はデートDVになりそうだったけれど気持ちを伝え合う女子生徒と男子生徒の設定。どのように気づき、気持ちを伝え、相手を受け入れるかという具体的なモデルを見せる。劇は二種類。スマホ版と性暴力版。学校にどちらかを選んでもらう。
デートDV予防教育を人権教育の一環として位置付けしている。プログラムは知識の提供、身近な問題として捉えること、行動変容に至ること、の3つを柱に構成している。実施前に講師が必ず担当教員と打ち合わせを実施し、学校側の要望を確認し、強調点や言葉の解説、具体例の提示など伝わりやすい方法を検討し、プログラムに反映させている。また、教員間での知識、理解等を深めるための教材提供などにも対応している。

山口のリ子さんが代表を務めるアウェアのデートDV防止プログラムを提供している。特徴は、デートDV防止教育に欠かせないジェンダーの視点が入っていること。又、ロールプレイを取り入れた参加型であること。生徒さんへの問いかけをなるべく多くして考えてもらうことで当事者意識を持ってもらえたらと思っている。ロールプレイは和やかな雰囲気の中で身近なこととして考えてもらえる。
①活動地域が10代の中絶件数が全国平均の倍であること、講師が助産学科にて教えていること等から、中絶件数と性感染症を正確に伝えている。②県教育委員会施策である親子で学ぶ規範意識教育の中で、性加害性被害を伝えると共に、恋人からの一方的な性行為の問題を伝えている。③色覚障害の人が見やすいようにパワーポイントの色にも注意している。④助産師が相談員を務めている法人が運営するサイトの相談窓口を自治体の相談先と共に紹介をしている。⑤講師は中学・高校教員資格を持つ者によって行われている。
NPO法人DV防止ながさきに講師を依頼。センターでも養成講座、スキルアップ講座を行っている。実施後、アンケートをとり、その後の学校教育に活かせるよう情報を共有している。必要な場合は、個別に専門家の支援にもつなげられるように考慮している。平成28年度より新たに特別支援学校でも実施している。
具体的にデートDVが、どのようなものか理解してもらうため、ロールプレイ（寸劇）を講座中、二回入れている。そのため3人チームで講座を実施している、ロールプレイから束縛、約束、性行為の合意、SNSの危険性等へ話を広げていっている。難しい言葉や熟語等は理解されないことも多々あるため、できるだけ分かりやすい言葉で説明するように努めている。また、常に新しい情報や事件を取り上げるようにして、今を生きる学生たちに寄り添うことを旨としている。
・最初に簡単な質問表に答えることで、生徒の持っている暴力についての考え方を認識させる。・生徒自身が演じる、DV関係にあるカップルの寸劇を見る。・最初と同じ場面を同じ生徒が今度は対等な関係として演じる。・演じた生徒へのインタビューを実施する。友人が演じることで、生徒がデートDVを身近な問題と感ずることができて授業への関心が高まる。・講義用のパワーポイントは図やイラストを使ったり、中・高校生にわかりやすい言葉を使うなど工夫している。

実施にあたり苦労していることや改善したいこと、要望等がありましたらお書きください。
デートDVを予防することは、つまり人と人との対等であることを伝えることだが、学校内で教師と生徒の関係がどうしても上下関係になっていること。恋人同士の前に、日々の学校生活で教師と生徒が対等な関係であることを実践することが必要だと考える。それが難しいからこそ、外部からの講師が人権を伝える意義がある。
事例としてDVDを活用しているが、数年前のものしかなく、情報として古くなっている。束縛の事例でメールでのやりとりなど、古いものを使っている感が出てしまう。新しいDVDが欲しい。授業時間が限られているので、2～3分でデートDVの事例を紹介したものがあるいいと思う。
予防教育の必要性を広めたい。中には被害を受けている子どももいることがあるので気を付けている。
長崎県は、離島や交通不便地域が多いため、一か所の実施に一日がかりの所が多い。講師養成研修も毎年実施しているが、年間、県内で90校くらいの実施希望があり、講師の養成が追いついていない。また費用負担が、県と一部の市町に限られ、民間団体の助成金に頼っている部分が大きく、まかないきれないところがある。各基礎自治体の男女参画担当や、教育委員会での予算確保がなされたらと願っている。
会場によって理解度や参加意識に差があるので、その場に応じて言葉を選ぶようにしています。被害者・加害者がその場にいることもあるので、十分配慮しています。昨年6月、デートDVの予防防止教育を実施していることで表彰して頂きましたが、もっと教育現場の方々に、必要性をアピールする必要があると思います。
実施にあたりスタッフが複数で行く為、スタッフの人数確保や経費がかかること。学校ごとの綿密な打ち合わせを行い、課題に沿ったプログラムを作成しているため、実施当日までの準備時間の確保にも苦労している。スタッフが女性のみなので、多様な性のスタッフがいることが望ましいと考えている。
県教育委員会がデートDVをテーマとして取り組んでいた時は実施依頼が多くあったが、年々実施回数が減っている。広報手段等、今後どうやって広げていくかが課題。また、プログラムの中でLGBTへの配慮について検討していく必要性を感じている。
学校から依頼の場合、体育館を会場にして全校生徒を対象に1時限でというような、成果を得にくい条件の依頼もあります。また、限られた予算での単発の依頼も多く、継続的な取り組みになりにくいです。
学年の単位で依頼されることが多いため、集中が途切れないように配慮すること。
高校生では遅すぎると考えるようになり、中学校での必要性を感じている。そこで、より身近に感じてもらえるために、若い方たちの考えを聴こうと、ワークショップ形式で、漫画をみて意見交換をする講座を実施した。今後はその内容を講演に活かしていきたいと考えている。大学生が中学生に伝えられるように、プログラムや人材育成ができるような取り組みをしていきたい。

①費用が少ない事。1コマ講師謝礼2万円（交通費別）で希望しているが実際はそれだけいただけるところは少ない。特に新潟市の委託は半額以下（交通費込で1万円）。十分な報酬を払えないこともあり、講師をやりくりしているので、事前打合せは初めての所以外は、電話にしている。アンケートを十分見直す時間を取ることも難しい。②講師の育成③多様な生徒に関心を持ってもらうスキル

高校での実施は50分間の単発が多く、内容の絞り込みに時間を要している。アンケートを実施し、出来る限り早く結果のフィードバックを行っているが、学校側からその後の生徒さんの反応や教員間での教育上の継続した取り組みなどについてフィードバックを得られることはほとんどない。多くは、特設授業になるため毎年担当者が変わり、前年度の引継ぎや内容の理解について差がある場合も少なくない。その場合、担当者との打ち合わせにおいて、生徒さんの姿や教育上のニーズがみえないこともある。その点では、学校側との連携は十分とは言えない。

高校生の場合、男子が多いとざわつきが大きく、ロールプレイでもふざけてしまうことがある。向き合いたくなく照れているのだと思う。中学生だと真剣に聞いてくれていてロールプレイもふざけることはない。本来90分のプログラムを50分～55分でしか行えないことが多く、大事な伝えたいことをカットせざるを得なかったり時間的なゆとりがなく苦慮している。デートDV防止教育は今後全国的な拡がりをもって取り組まれていくべき事業だが、学校には予算はなく、行政においてもせっかくついた予算が毎年削減されている状況で非常に残念な思いでいる。

基本は90分授業だが、学校によっては50分しかとれない場合もある。季節によっては冷暖房のない部屋で過酷な環境での授業となる場合もある。学校ごとに抱えている問題や課題が違うので、個別に丁寧に対応していきたい。県内講師の確保。

実施校は、それぞれの事情や特性、要望が異なり、事前に打ち合わせをしても行ってみなければ分からないことも多く、どのような状況であっても臨機応変に対応できるようにしている。講座の時間も、学校によって違うため、できれば余裕が持てる時間をいただきたいと考える。

実施している学校のほとんどが、各自治体が予算設置し実施したものである。学校単独で実施する場合は、費用負担の問題が大きいようで、こちらが設定している費用を負担してもらえない学校もある。将来のDV被害者・加害者を出さないためにも、どの学校でも平等にデートDV防止教育を実施することができるよう、県・市町行政に対する予算設置を望むものである。

調査結果に寄せて

調査結果に寄せて

認定 NPO 法人エンパワメントかながわ
(デート DV 防止全国ネットワーク事務局)
理事長 阿部真紀

1. はじめに

昨年 3 月、デート DV 防止全国ネットワークを設立し、デート DV 防止活動をする団体や機関を募集し、デート DV 防止全国マップ (notalone-ddv.org) にまとめたところ、すでに 100 以上の団体や機関を掲載することができました。まだまだ情報が届いていない県もありますので、実際には、200 近くの団体や機関、あるいは個人がデート DV 防止活動を行っていることが考えられます。

今回の集計結果は、その中の 25 団体からの回答をまとめたものであり、全国の状況を網羅したものでないことをまずご了解ください。

デート DV を予防することは、DV や虐待をなくしていくことに繋がる、私たちはそう信じて予防教育の普及を進めてきました。

これから、全国ネットワークとして繋がり、予防教育を普及していくためには、3 種類の調査が必要だと考えています。

- ・デート DV の実態を明らかにすること
- ・デート DV 予防教育が各地でどのように行われているかを明らかにすること
- ・デート DV 予防教育の効果を明らかにすること

昨年、全国規模の実態調査としては初めてとなる「全国デート DV 実態調査」を行いました。「デート DV 白書 VOL.5」としてまとめ、サイト (notalone-ddv.org) にも公開していますので参照ください。ただ、こちらにも実際には 1 都 10 県での調査であり、全国の実態を網羅したものではありません。しかし、今回の「デート DV 予防教育実施状況調査」も合わせ、いずれも初めの一歩として大きな意義があるものと考え、今後も調査を継続していきたいと考えています。もちろん、効果測定についても、学識経験者のご協力をいただいて準備をしていきます。

2. 調査結果について

1) 受講人数と実施回数

まず、25 団体が 2016 年度 1 年間に実施したデート DV 予防教育の受講人数は約 10 万人。
団体にはもちろん大小がありますが、1 団体が実施した人数は平均して 4,000 人。実施回数では 580 回、
1 団体の年間平均実施回数は 23 回となりました。

2) 実施している学校

学校種別ごとでは、小学校、中学校、高校、大学・専門学校のどの学校でも、デート DV 予防教育が実施されていることがわかりました。25 団体のうち 1 団体（大阪）のみですが、小学校での予防教育を実施している団体があったことも注目されます。

割合にすると、受講人数では、高校が 68%と大半を占め、次に、中学校 22%、大学・専門学校 10%、小学校 0.5%となり、実施回数では、高校 51%、中学校 31%、大学・専門学校で 14%、小学校 4%となりました。受講人数と実施回数の割合の差からは、高校での実施は、他に比べて 1 回の受講人数が多いことが伺われます。

3) 予防教育の効果が高い学年

どの学年で、デート DV 予防教育を実施するのが一番効果的であるかは、巻頭座談会でも意見が様々あるように、今後検討していく必要があります。ただ、受講人数が一番多い高校よりも、義務教育期間である中学での実施を増やしていく必要があることに注目してほしいと思います。

もちろん、デート DV 予防教育とひと口に言っても、対象となるそれぞれの年代によって、プログラムが異なるでしょう。理想的には、一人の生徒がそれぞれの年代で何回でも受講できるのが望ましいと思います。筆者が活動する神奈川県では、「中学の時にも来てくれたよね」と声をかけてくれる高校生や、「前にも同じ団体のプログラムを受けたことがあるが、今回はより身近に感じた」と感想を書く大学生にも出会うようになってきました。そんな子どもたちが増えることが、被害者も加害者も、そして傍観者も作らない社会に繋がっていくと考えています。

また、ただ実施すればいいのかと言うと、そうではないことを示していく必要があると考えています。「費用対効果」ということが言われ、一度に多くの生徒に、それも短い時間で実施することを求められることも多いのではないのでしょうか。本当の意味での効果がどんな形だから生み出されるのかということを実証していく必要があります。

4) 実施単位

実施単位として、クラス単位・学年単位・学校単位と分け聞いたところ、一番多かったのは学年単位 58%、次にクラス単位と学校単位がどちらも 15%でした。学年と言っても、100 人程度から 400 人程

も、100 人程度から 400 人程度まで学校によって違います。

エンパワメントかながわでは、もともと 1 クラスに 3 名のスタッフが入り寸劇を行うクラス単位の形から学年単位も行うという形に広げてきました。学校が授業時間を割くということからも、費用的にも、また派遣するスタッフの確保の点からも、クラス単位で実施するには困難がたくさんあります。しかし、一人ひとりが大切な存在であること、そして人と人との対等な関係を築く大切さを伝えるためには、少人数の方が効果的であることを実感しています。私は、予防教育の普及とあって、大人数で一度に実施する方法だけが広がるのは避けたいと考えています。

5) 実施時間

実施時間として、1 回あたりのデート DV 予防教育の時間を 45 分以上 60 分未満、60 分以上 90 分未満、90 分以上 120 分未満、120 分以上、その他とし聞いたところ、一番多かったのは、60 分以上 90 分未満の 41%、次いで 45 分以上 60 分未満 36%、90 分以上 120 分未満 16%となりました。

これもプログラムの内容と関わってくるのかと思います。デート DV とはどんなことなのかを伝えるだけではなく、デート DV ではない関係を築くために何ができるかを伝えるためには、少なくとも 60 分以上が必要なのではないかと考えています。

6) 実施料金と費用負担

デート DV 予防教育の 1 回あたりの料金（交通費を含む）について、無料、1 万円未満、1 万円以上 3 万円未満、3 万円以上 5 万円未満、5 万円以上 10 万円未満、その他とし聞いたところ、一番多かったのは、1 万円以上 3 万円未満の 45%、次いで、3 万円以上 5 万円未満 28%となりました。

また、その費用の負担元について、行政（委託等）、学校（生徒・PTA 等）、民間（助成金等）、無償、その他に分けて聞いたところ、行政が一番多く 53%、次いで、学校 23%、その他 10%、無償 9%、民間 5%となりました。

今回の調査では、学校の教師が行う予防教育は含んでいません。また、行政機関が職員を派遣する場合にはこの回答はできない（無償またはその他に含まれる）と考えられます。

外部からデート DV について専門知識を有する講師が学校に入り、予防教育を実施する形を広げていくためには、費用が必要になります。デート DV を予防することが DV や虐待の減少につながると認識され、行政予算が確保されていくことを私たちは目指していきたいと考えています。

今回の結果は決して全国の状況を反映していないと確認させていただいたうえで、少々乱暴ながら、生徒 1 人あたりの費用の平均を出してみた（1 万円未満→5 千円、1 万円以上 3 万円未満→2 万円、3 万円以上 5 万円未満→4 万円、5 万円以上 10 万円未満→7 万円として計算）ところ、約 120 円となりました。

生徒 1 人に 120 円計上できたら、効果的な予防教育を実施できるでしょうか？これもまだ実証段階に

入っていないため、活動する中での実感としての意見となりますが、私は難しいと考えます。神奈川県内では、生徒 1 人 700 円としてクラス単位のワークショップを提供させていただいています。各団体で議論を重ねていきたいところですが、私はせめて生徒 1 人 500 円の予算計上を目指していきたいと考えます。

7) 都道府県別の受講人数

最後に、都道府県別の受講人数をまとめてあります。

今回回答いただいた 25 団体のうち、九州地方が 6 団体と多かったことが理由だと思いますが、長崎県や佐賀県の受講人数が多くなりました。他に多かったのは、千葉県、兵庫県、新潟県、神奈川県などです。

これも単に人数であるより、人口比で考える方が妥当だと考えます。たとえば中学校に限ってみると、県内の中学生の生徒数のうち、中学生の受講人数の割合をみると、佐賀県が一番高く 14.4%、次いで長崎県 12.2%と、当団体のある神奈川県の 1.3%の十倍以上という結果となりました。たとえば学年単位で毎年行っていくことを考えると、年間の受講人数が 33%であれば中学生のうちに 1 回は必ず受講できることとなります。

3. 今後に向けて

以上のように、この調査でわかったことは、デート DV 予防教育を普及していくためには、たくさんの課題があるということです。

今回は言及していませんが、プログラムの内容の違いについても考えていく必要があります。デート DV という言葉が生まれて 14 年半、全国各地で始まったデート DV 防止活動は、それぞれ自主的に進められてきたものが多く、手法が異なるのは当然です。でも、せっかく全国に 100 以上の団体や機関が防止活動をしていることがわかったのですから、「デート DV をなくしていく」という一つの目的のために繋がり、力を合わせたいと考えます。

デート DV をなくすということは、どんなに好きな人同士であっても、違いを認め合い、上と下ではなく、対等な関係を築いていくことです。その活動を推進する私たち団体や個人同士が違いを乗り越え、協力していくことこそ、社会を変える切り札になると考えます。デート DV を予防することで、きっと社会を変えることができると信じ、デート DV 防止全国ネットワークとして、連携を呼びかけていきますので、どうぞご協力をお願いいたします。

認定 NPO 法人 エンパワメントかながわ

どんな人も一人ひとりがとても大切な存在だと伝えていきたい…

暴力のない社会の実現を目指して、神奈川県内を中心に様々な人権啓発活動を行っている認定NPO法人です。「CAP（子どもへの暴力防止）プログラム」の提供を柱として、「デートDV予防プログラム」「すきっぷ（子どもの護身法）プログラム」「特別支援学級に通う子どもへの暴力防止（ほっと）プログラム」など、すべての人に人権があることを啓発していくためのプログラムを開発、提供しています。

団体ホームページ：<http://npo-ek.org/>

デート DV 白書 VOL.6

デート DV 予防教育実施状況調査報告書

発行：2018年3月

発行者：認定 NPO 法人エンパワメントかながわ kanagawa-cap-miracle@isis.ocn.ne.jp

（デート DV 防止全国ネットワーク ddvbousinet@yahoo.co.jp）

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製複写（コピー）することは、著作権上で認められている場合を除き、禁じられています。本書のデータや文章などを引用する場合は、必ず出典を明記いただき、当団体へご連絡をお願いいたします。

「WAN 基金助成事業」によって作成されました。

